

Z32-B88

島崎藤村 島生馬 監修

金の船

三日月號

国立国会
8. 3. 26
図書館



第參號

第參卷

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
cm
1 2 3 4 5 6 7 8
inches

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G
Y
M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
 抒作 情叢 詩書 名の 第三編 出 來 いま ます



野口雨情先生新著

袖珍箱入表頼頗美本七製全一冊
 實價金九十錢 送料金五錢

民謡集

別後

發行所

東京市神田區南神保町
 東都府京東一三九四番

尙文堂

皆

さんが長くお待ち兼ねの、野口雨情先生の民謡集がいよいよ
 出来ます。先生の作品は當代並ぶ者なしとの高評ある如く、
 血あり、情あり、涙ある者の何人も一讀卷の了るを忘れしむ

降る雪に、又春雨に、ふることを想ふ人よ。先づ本書におの
 ゆく雲に、又飛ぶ星に、都を偲ぶ若か人よ。御上

が胸の苦を問ふ可し。本書には「下總のお吉」「焼山小唄」込
 篇の代表的傑作のみを載せ、且つ本居長世先生の作曲も添へり。願送

第一編 第二編

西條八十先生靜かなる眉

袖珍箱入天金頗美本全一冊
 實價金九十錢 送料五錢

水谷勝先生寶石の夢

袖珍箱入天金頗美本全一冊
 實價金九十錢 送料五錢

雛人形陳列會
 二月一日より開催
 白木屋呉服店

新時代の要求に
應ずる特例提供

三越



金船の童謡			
吹込レコー			
十五夜お月さん	鶏さ	四丁目の犬	人買船
つばめ	ば	め	
本居みどり子			

子供は小鳥と同じやうに本能的に歌を歌はなうでばあられない人間です

其子供達に眞に面白く歌ふべき歌を與ふるの此レコードの使命です。



株式会社 日本蓄音器商會
神奈川県藤川町

毎月新譜發賣
月報目錄送呈



春の此の日和を

.....三越へ、必要品揃ひの三越へ

三越の店は常に清新の氣に満ちて居ります、殊に流行の新品や、その他澤山取揃て御座います。

◆◆東洋品陳列 ◆◆支那を中心としたる、東洋の雜貨を集め三月五日より

◆◆春季新柄陳列 ◆◆三越獨特の流行の新柄呉服類を三月二十日より陳列

◆◆三越の三月の定休日◆三月十日◆三月廿五日◆

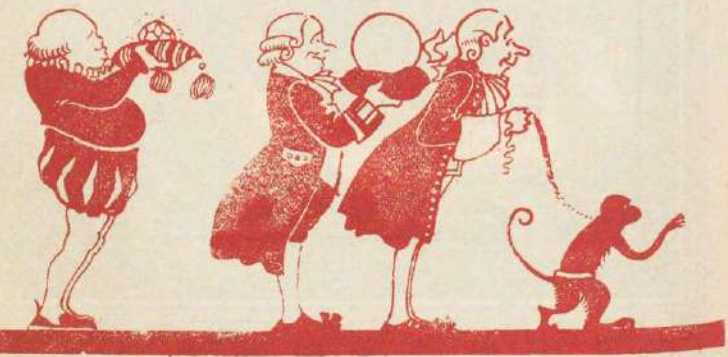
東京 越三越呉服店

目次

三色すみれ (光緒、石版刷) 岡本歸一
 保食神 (口繪、原色版) 岡本歸一
 九官鳥 (湘著) 一本居長世
 鷺鳥 (童話) 三野口雨情
 世界の誕生 (日本神話) 四楠山正雄
 寒稽古 (繪ばなし) 四岡本歸一
 鏡國めぐり (長篇童話) 六西條八十
 支那伊蘇普物語 六楠山正雄
 馬賊と仙人 (童話) 三廣津和郎
 笹の舟 (童話) 七佐藤八郎



肉のゆくへ (エッセイ) 元船橋重一
 晴雄さんと瑠璃子さんと仔猫 (童話) 四三宅房子
 小人の果物 (童話) 四多田園子
 諸國傳説物語 五藤澤衛彦
 惡龍の閉口 (童話) 五馬場孤蝶
 太閤様の猿 (推薦童話) 七益田一郎
 九官鳥 (童話) 七野口雨情
 丘の草 (童話) 七野口雨情選
 自轉車 (自由畫) 七山本鼎選
 けんととび (編方) 七編輯部選
 雲幼年詩 七若山牧水選
 通信 八
 挿繪 八岡本歸一





魚よ、出る、出る、出る

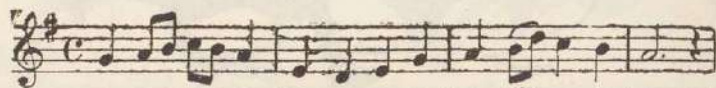
岡本綺一畫

保食の神が、此度は海の方を向いて、
 「魚よ、出る、出る。」
 といひながら、また大きな口をあきますと、
 だの比目魚だの鯛だの雑魚だの大小のお魚が、
 その口からぞろりくと出て、そこらをびよん
 びよんはねまはります。『世界の誕生』の九頁を御覽
 なさい)



九官鳥

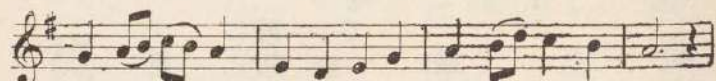
本居長世作曲



1 2 3 4 3 2 | 0 5 6 1 | 2 3 5 4 3 | 2-0 |
お(わんて)に きみがよ うた-はせよ



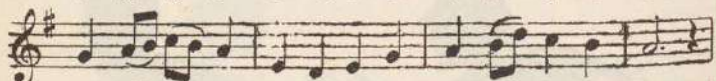
3 1 2 1 2 | 5 3 2 1 | 6 1 2 3 2 | 1-0 |
ちよに -- やちよに うた-はせよ



1 2 3 4 3 2 | 0 5 6 1 | 2 3 5 4 3 | 2-0 |
あ-ひに きみがよ うた-はせよ



0 1 2 1 | 6 1 5 6 | 0 1 2 3 2 | 1-0 |
いははこ たりてこ うた-はせよ



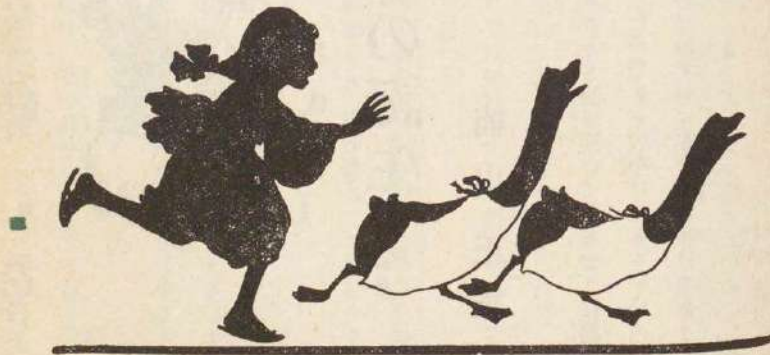
1 2 3 4 3 2 | 0 5 6 1 | 2 3 5 4 3 | 2-0 |
わた-し-も きみがよ うた-ひきせ)



0 5 6 7 | 2 7 6 5 | 0 1 2 3 2 | 1-0 |
レフレソレミ うた-ひきせ)



駈けて通らう
 みんなで 並んで
 駈けて通らう
 鴛鳥も 一緒に
 駈けるだらう
 長い頸 ふりく
 駈けるだらう



鴛鳥
 野口雨情
 鴛鳥に 腹掛
 かけさせて
 みんなで 遊びに
 連れて往こ
 玩具屋の 表は





世界の誕生

(日本神話)

楠山 正雄

一、天地のはじめ、人間のはじめ

むかし〜大昔、神様もまだお生れにならない遠い〜昔のことでした。

その時世界は、果てしもなく大きな暗闇でした。その暗闇は、目も鼻もない、ぶよ〜とした大きな

塊のまゝ、とろり〜と油が浮いてゐるやうに空の中に浮いてゐました。でもその中にはもう、いろいろの生き物の種が、かすかに芽をふきかけてゐました。

やがて時が来ると、このまつくらな大きな塊が、

中からそろ〜動き出して、軽い、ふは〜した空気のやうなものは、上へ上へと上がつて行つて、そこに天ができ、重い、どろんとした溝どろのやうなもののは下へ下へと下がつて行つて、そこに地ができました。それでも世界がやつと二つに分かれたといふだけのことで、天も今のやうに青く澄んではゐず、地もまだ陸と海とはつきりとは固まらず、できたてのやはらかな土が、あちらにもふはりふはり、こちらにもふはりふはり水の上になつて浮いてをりました。

やがて春が来て蘆の芽がついと出るやうに、この世界に神様が一人、ひよつこりとお生れになりました。この神様を天の常立の神とも國の常立の神とも申します。それから引きついで後から後から神様がお生れになつて、ちやうど七代めに伊弉諾、伊弉冉といふ男と女の神様が、初めてお生れになりました。

た。

この時分には天ももうすつかりでき上がつて、神様達のお集りになる高天原には、草や木が青々と繁つてをりましたが、地の上は相變らず、まつくらで、どろんとした泥海のやうなものでしたから、神様達は或日高天原に集つて御相談をなさいました。「いつまでもあれではいけない。下界を固めて國を作ることにしよう。」

かう神様達は仰しやつて、中で一番若い伊弉諾、伊弉冉お二人の軸様にこの役が當ることになりました。

そこでお二人の神様は、國の常立の神から、天の瓊矛といつて、きれいな玉の澤山についた大きな矛を頂いて、天からはるる〜下界へお下りになることになりました。

さて二人の神様は、空の真中にかゝつてゐる天の

浮橋の上に立つて、下界の様子を御覧になりましたが、それはまるでくらしい泥沼の底をのぞくやうで、どこへどう下りていいのか、かいかも見當がつきません。でもだん／＼見てゐると、そのくらしい底に、かすかにうよ／＼動くものがあるやうなので、「あの邊に陸があるかもしれないね。つゝついて見てやらう。」

と伊奘諾の神が仰しやつて、天の浮橋の上から矛を下してそろ／＼と探つて御覧になりましたが、やはり手答へがありません。

「おやおや、陸だと思つたら、やつぱり海だつた。」伊奘諾の神はかうつぶやきながら、いま／＼しさに矛の先で海の水をがらがらとかきまはしてお引上げにならうとすると、矛にたまつた潮水が、ぼたりぼ

たりと垂れ落ちました。その垂れたしづくが見る見の鹽のやうに固まつて、やがて小さな島がそこにできました。海の潮が自づと凝り固まつてできた島だといふので、この島を自凝島といふのです。伊奘諾の神はそこで伊奘冉の神を連れて、天の浮橋から始めてこの自凝島にお下りになり、これからお作りにならうとする日本の國の礎をここにお定めになりました。お二人はまづ島の真中に天の御柱と



いつて、天までとゞくほど高く地の底までとゞくほど深い柱をお立てになり、八尋殿といふ御住居がすつかり出来上がると、お二人は天の御柱を、女の神様は右から、男の神様は左から、お廻りになりました。廻りながら、真中で出會ふと、

「何といふ美しい方でせう、あなたは。」と女神が思はず感動して、はつとため息をおつきになりました。すると男の神様も、

「まあ、何といふ美しいひとだらう、あなたも。」と仰しやいました。そこでお二人ははじめて、御夫婦の神様におなりになりました。

御夫婦になつてから、お二人の神様は、澤山のお子さんをお生みになりました。初めのお子が淡路島で、その次が體が一つで面の四つある四國の島、そ

れから三つ兒の隱岐の島、これも體が一つで四つ面のある筑紫の島、(今の九州)それから天の一つ柱といはれた壹岐の島に、對馬に、佐渡の島、それから一番おしまひに、大倭豊秋津島、即ち日本の本州をお生みになりました。右の八つの島を大八島國といつて、これが日本の國の始めです。この外にも、矛の先から垂れた潮のしづくが凝り固まつてできた自凝島のやうに、海の水沫が固まり／＼してはできた

小さい島は何百といふ数で、とてもかぞへつくすことはできません。

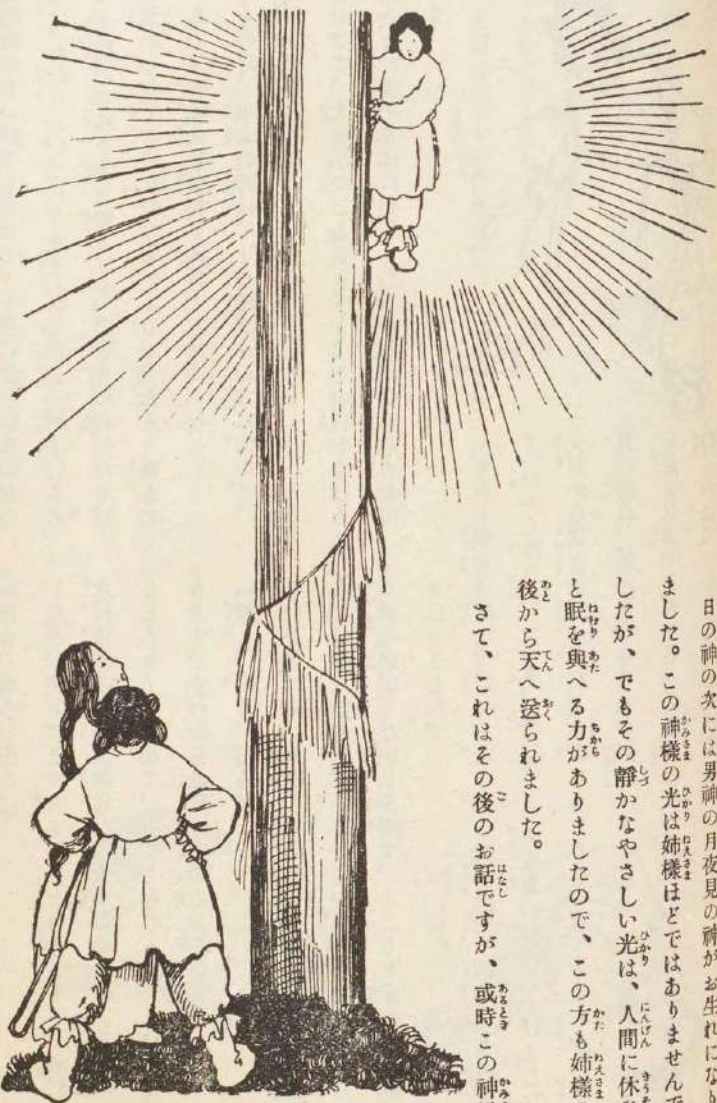
二、日と月の出現

きて大八島をはじめ、その下の何百とない小島ができて日本の國はだん／＼堅まつて行きましたが、あいにくどここも霧が深くつて、折角できた島島の姿も形も見えませぬ。伊奘諾の神は、その時、「わたし達の生んだ國は、朝霧の匂ひで息もふさがらやうだ。」

と仰しやつて、ふうと霧をお吹きになると、その息の下から風の神がとび出しました。またお腹のお空きになつた時に、穀物の神が生れました。河の神、海の神、野の神、山の神、それから草や木の神も生れました。伊奘諾の神はその時女神に向つて、「大八島の國も生んだし、山も川も草も木もみんな

生んで、まづこれで世界の形ができた。此度はこの世界の王様になる人を生まなければならぬ。』と仰しやつて、日の神様をお生みになりました。此の神様がお生れになると、目の眩むやうな貴い光がかつと射して、忽ち世の中が明るく照りわたりました。御両親の神様もびつくりなさりながら、嬉しうに手を拍つて、

「澤山子供を生んだ中でも、これほど不思議な神々しい子は生れなかつた。地の上に置くのは勿體ない。早く天へ送つて、高天原の主にしよう。」と仰しやいました。そして天と地の間に立つてゐる天の御柱を傳はつて天へお送り上げになりました。その時分は、天と地の間がそれほど近かつたのです。この日の神は女の神様で、お名は大日靈貴、また天照大神と申上げて、永く光明と慈愛の神様とお仰がれになる方です。



日の神の次には男神の月夜見の神がお生れになりました。この神様の光は姉様ほどではありませんでしたが、でもその静かなやさしい光は、人間に休息と眠を興へる力がありましたので、この方も姉様の後から天へ送られました。さて、これはその後のお話ですが、或時この神様

は姉様の日の神のお言付で、下界に住む保食の神の所へ、お使においでになりました。保食の神といふのは、人間の食物を掌る神ですが、月夜見の神がはるばる天からお下りになつたといふので、大そう喜んでいろ／＼御馳走の支度を始めました。

その時、保食の神は、まづ地びたの方に向いて、
「飯よ、出る、出る。」

といつて、大きな口をあけますと、その口からぼろぼろとお米がこぼれ出しました。此度は海の方を向いて、



すると保食の神は、口から吐き出した魚の肉や獣の肉を料理して、口から吐き出した米の飯に添へて月夜見の神に差上げました。先刻から保食の神の爲わざを汚ならしさうに見ていらした月夜見の神は、静かな、やさしい神様ですけれど、大へん清いことのお好きな方でしたから、この時もう一度にむか／＼して来る胸を叩かかねて、いきなり胸を抜くと、

「魚よ、出る、出る。」

といひながら、また大きな口をあきますと、鯛の比目魚だの鱈だの雑魚だの大小のお魚が、その口からぞろり／＼と出て、そこらをびよん／＼はねまはります。それから此度は山の方を向いて、

「獸よ、出る、出る。」

といひながら、大きな口をあきますと、「毛の荒物」といはれる熊や猪、それから「毛の和物」といはれる兎や鹿がとび出して来て、そこらを元氣よく駆けまはりました。

「儼然しい真似をするな。貴様の口から吐出したものが食べられるか。」と仰しやつて、いきなり保食の神の首を切つておしまひになりました。そして後をも見ずに、ぶん／＼怒つて天へ還つておしまひになりました。姉様の天照大神はこの話をお聞きになると、大へん弟の神様の亂暴をおむづかりになりました。

「あなたのやうな、無慈悲な、亂暴な神の顔をわたしはもう二度と見たくはないから。」

かう女神は仰しやつて、弟の神様からついと顔をそむけておしまひになりました。それから同じ天の上に住みながら、日の神様と月の神様とは、晝と夜とに分かれてお住ひになることになつて、決して御一所になることはないのです。

また月夜見の神に斬り倒された保食の神は、それでもどうなつたかとお思ひになつて、天照大神は、天の熊大人といふ神を見させにやりました。可哀さうに、もうすつかり息は絶えてゐました。そして、死骸を見ると、頭からは牛と馬が生れ、額には栗が生え、眉の上には蠶ができ、眠つてゐる眼の中には稗が成り、腹の中には稻が育ち、お臍の所には大豆



と小豆ができてゐました。天の熊大人はこの品々を一つ一つ丁寧に取つて、持ちかへつて天照大神の御目にかけてますと、大神は大そうお喜びになり、

「これは人間の生きて行く大切な糧だ。」

と仰しやつて、粟と稗と、小豆と豆の種をば畑に、稲の種をば田にお蒔かせになりました。やがてその稲の種から、芽をふき、葉を生じて、その年の秋には美しい金色の穂波が風になびくやうになりました。また蠶の繭を口にくんで引くと、美しい絹糸がすう／＼とでて来ました。耕作の業と養蠶の道もこれから開けたといふことです。

さて、また日の神と月の神の次についてお生れになつたのは、素戔雄命といつて、月夜見の神に何十倍も優れたはげしい氣象の方でした。この神様がはじめて地の上の人間の仲間へお下りになつて、いろいろとめざましい爲事をお残しになつたのです。

三、火の神

かういふわけで、伊弉諾、伊弉冉二柱の神様のお骨折で、陸と海はわかれ、山は聳え、川は流れ、草と木はその間に繁つて来ました。天には日と月が交る／＼輝いて晝と夜とが分かれ、風が吹き、雨が降つて、人間は光明と闇黒と、歡びと悲しみを知るやうになりました。人間が生て行くために地の上には稲や麥が生り、やがて獸や魚の肉を食べる道までも開けたのですが人間はまだ火を焚いて煮炊きすることも知りませんし、火を焚いて暖まることも知りませんでした。

「火がなければ人間は生きては行かれない。」

かう仰しやつて伊弉冉の神はとう／＼火の神の迦具土をお生みになりました。けれど何にしても恐ろしい火のことですから、神様はお産の時に大火傷を



なすつて、それがもておかくれになりました。長い間一所にゐて御苦勞をなすつた女神にふとしたことでお別れになつた伊弉諾の神のお嘆きはどん

なでしたらう。

「たつた一人の子供を生むばかりに、命にもかへられないだいな人をなくしてしまつた。」かう仰しやつて神様は、死んだ女神の枕元に這ひすり、また足元に這ひすつて、おい／＼大聲をあげてお泣きになりました。その涙が湧き返り／＼、どん／＼流れて大和の國の香具山の畝尾の丘の下たにたまつて、泣澤の池になつたといふことです。そしてお怒りにまかせ、劔を抜いて生たばかりの火の神の體を三つに斬り、

五つに斬り、その上八つに斬りこまざいておしまひになりましたが、その斬りこまざいた火の神が幾萬千とない火花になつて、とび散て、雷になつたり、稲光になつたりしたといふことです。(つづく)



二

だん／＼無中になつて、僕は
 岩見重太郎さ、僕は朝日奈三郎
 さ、御めん御こて、とやつて居ま
 すと、ふいに『やかましい！』
 岩見重太郎も朝日奈三郎もち
 ちみ上つてゐますと、くす／＼
 笑つて向へ行く奴があります。
 畜生！ 山田の奴だ、よくも
 おどかしたな、おぼへてゐろ』
 書生のくせに生意氣な奴だ』
 やろう、やろう、ほん／＼御ど
 う御めん、そんなひどくぶつち
 やいたいよ、もう少しそほつ
 と、と岩見重太郎福音をふき出
 したり。



寒けいす

岡本婦一

一

撃剣の寒稽古を見てから僕等
 もやりたくて耐らない、春雄さ
 んを呼んで来て新聞紙をくるく
 る何枚も何枚もまいて竹刀をこ
 しらへました。
 やつて見ると、そんなにいた
 くもありせまん、がまんできま
 す。さわぐと又お父さんに叱ら
 れますので、こここそやつてゐ
 ました。やつ／＼ほん／＼、



四
それからは一層さかんに、え
いつやつぼん／＼御めん、どつ
こい、とやつてゐると、
「誰れだッ」
そらきたぞ、僕はふすまのか
げへ、春雄さんはぼん／＼。ま
つてゐるとも知らず、がらりほ
かんどつた、まいつたらうと見
ると、山田と思ひの外こん度は
ほんとお父さん、や大變と思
つたがもう間に合はない。竹刀
をとられてさん／＼お目玉
頂戴山田の奴お父
さんのうしろで又
にやにや。



三
その内に又えへん／＼。お父
さんのまねしてゐるな、こんど
こそと、二人でふすまの蔭にか
くれてさあこいと待つてゐる、
がらつとあけて、ぬう！と首を
出した。
ぼん／＼。なぐつたと思つた
ら、山高帽子が回んでころ／＼、
又だまされたか、残念至極、口
惜しくて耐りません。
「ね！春雄さんいゝ事がある」
内所話でいゝ考へを話しました。
「うん、よし／＼、僕がやつて
ゐるまねして、そこらをおつて
居ればいゝんだね、よし／＼」



鏡國めぐり

(長篇童話)

西條 八十

四、もの云ふ花園

階段をフワ／＼宙に浮くやうにして下りて行つたあやちゃんの足は、やがてトンと地面へ着きました。「アラ向ふに小さなお山が見えてよ。あのでつべんへ登つたら、キツトお庭中の景色がよく見えるわ。」あやちゃんはひとり言を云ひながら、今度はそのお山の方へ歩きかけました。ところが妙なことは、路がぐね／＼曲つてゐて、二三べん角をまがつたかと思ふと、いつかまたもとの家の前へ戻つてきてしまふのでした。

「ずるぶん寝ねえ。寝てこに曲つた路ねえ。これでは路ちやなくつて、まるでコルクぬきのやうだわ！ あゝわかつた！ これを行けば大丈夫お山へ出られてよ。おや／＼、やつばしだめ、まつすぐにお家へ戻つてしまふわ。あゝ今度はこちらを行つて見ましよう。」

あやちゃんはいろ／＼に工夫して、いろ／＼な路をあちこち曲つて歩きましたが、どこをどうしてもやつぱりもとの家の前へ戻つてしまふのでした。一度などは、わざと速足でツイと角を曲りますと、あつといふ間に家へつき當つてしまひました。

「よくつてよ。おまへは、あたしの邪魔をして、どこも見物させずにまた鏡をぬけてもとのお室へ歸さうとしてゐるのだね。いゝわ、そんな意地わるなか勝手にたんとなさい。あたしはあたしでキツトうまくやつて見せるから。」

あやちゃんはいろ／＼と、チツと眼の前の家を睨めつけてかう云ひました。さうして今度は思ひ切つてクルリと背中を家の方へふりむけ、何があらうともかまはずまつ直ぐに山のでつべんまで行く決心で、グン／＼前へ歩きだしました。暫くの間はだいぶうまい工合に行きました。そこであやちゃん

は、「

「今度こそはあたし、ほんとに行つて見せるわ。」と云ひかけたとき、路が急に何だかぐら／＼と動いたやうな気がして、いつか自分はまたもとの家の方へ歩きかけてゐました。

「アラ、ずるぶんひどいわ。」と、あやちゃんはがっかりして呼びました。

「あたし、こんな通せんぼをする家つて見たことないわ。ほんとにひどいわ／＼／＼。」けれどさう云つてゐる間も、のぼつて見たい小

山は相變らすハツキリ眼の前に見えてゐますので、あやちゃんはまたぞろ歩きだすよりほかありませんでした。すると今度はどうやら雑狗で縁をとつた大きな花壇の前へ出ました。背のたかい一本の樹がまんなかに立つてゐました。

「アラ、鬼百合さん！」

と、あやちゃんは風にゆれてゐる鬼百合の花に話しかけました。

「あなたが話が出来ると、ほんたうにいゝんだけど」

「出来ますよ。相當の相手さへあればネ。」と、鬼百合がだしぬけに口をききました。

あやちゃんはこれにはひどくビツクリして、しばらくは物も云ひませんでした。息の根がふさがつたやうな気がしました。けれどもデツと見てゐると、鬼百合はたゞおとなしく



風に揺れてゐるだけなので、恐々内腹ばなしをするやうな小さな聲で、

「ほかのどの花も、みんなあなたのやうな口がきけるの？」

と訊きました。

「あゝきけるとも、それもつと大きな聲でネ。」

と、鬼百合が答へました。

「オイ、オイ、娘つ子、おれたちに向つてそんな失禮なものゝ云ひかたをする奴があるかい。おれたちはさつきから一體おまへが口がきけるかどうかと噂してゐたんだせ。」

と、この時そばの薔薇が突けんどんな口をだして、「だが、オイ、鬼百合、この娘の顔はあまり利口さうでもないが、すこしはものが分りさうだね。それに色けもさう悪くないから、こゝしばらくは保つたらうよ。」

「ウム、色けなんかどうでもいいが、たゞこの娘の花びらがもうすこし捲き上つてゐたらよからうと思ふよ。」

と、鬼百合が調子を合せました。

あやちゃんはこんな風にいる顔の批評をされるのが厭だつたので、今度はこちらから質問をはじめました。

「お前さんたち、こんな淋しいところへ植ゑられて、誰もかまひ手が無いのに、ときとゝ悪いとは思はなくて？」

「だからまんなかに樹が樹つてゐるぢやないか！」



「だつてもし恐いことがあつたとき、あんな樹に何が出来る？」

と、あやちゃんが訊きました。

「吠えられるサ。」

と、善微が云ひました。

「ホウ／＼つて吠えるよ。だからあの樹のことを木の樹と云ふのサ。」

と、小さな雛菊が横から口を入れました。

「おまへさん、それ位のこと學校で教はらないのかい？」

と、もう一本の雛菊が云ひました。さうすると、それにつれて残らずの雛菊が一しよになつてキイキイ黄ろい聲をたて、騒ぎだしました。

「コラ／＼お黙りつてば！ 黙らないか！」

鬼百合はあんまり騒ぎがはげしいのでのぼせ上つて、首を縦横にふりたて、ひどくちれ込んでかうと

んな騒ぎをやるんです。」

と、さもなくやしさうにふる／＼顫えて云ひました。

「かまはずにお置き。」

と、あやちゃんは慰めるやうに云つて、まだ／＼騒ぎ出さうとしてゐる雛菊たちの方に身をかがめ、小さな聲で、

「おまへたち黙らないと、引つこぬいてしまふよ！」

と云ひました。

すると忽ちみんなはビタリと黙つてしまひました。なかでもうす紅い色の雛菊はよほど恐かつたと見えて、まつ白に色が變つてしまひました。

「まつたく、雛菊はいちばんいけない奴なんです。

ひとりが喋り出すと、みんなが揃つていつも騒ぎ出すんです。奴らの思ひ通りにさせといたら、私たちの方が萎れかへつてしまひます。」

と、いゝ氣嫌になつたらしい鬼百合が云ひました。



なりました。さうしてせい

せい息をつきながら、

「あいつらは私の手が届かないことを承知してゐてあ

「でもみんなはほんとうにお話が上手なこと。」

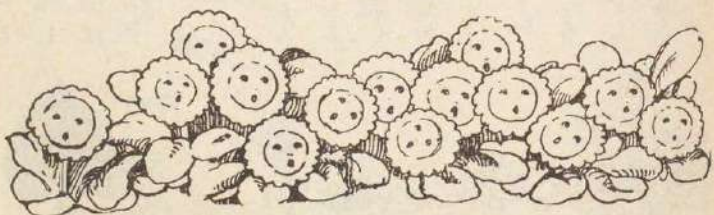
と、あやちゃんは花たちの心をやはらげて置きたいと思つて少しばかりお世辭を使ひました。

「あたしこれまでいろ／＼

なお庭へ行つてみたけれど、お話しの出来る花なんて無かつたわ。」

「まあその手で地面へさはつてごらんさい。さうすれば譚がわかるから。」

と、鬼百合が云ひました。あやちゃんは云はれた通りにして見て、



「ずいぶんコチ／＼してゐるわ。けれどそれが何のわけになるの？」

と尋きました。

「たいていの庭ではネ、花壇の土がごく柔かに出てゐるのだよ。だから花たちがいゝ氣もちでグウグウ眠込んでしまつてゐるのさ。」

と、鬼百合が説明してきかせました。

「なるほどこれはいゝ事をきいた。」

と、あやちゃんは思ひました。

「ところで、この庭にはもう一つお前さんとそつくり動きまはれる花があるよ。私はいつも不思議に思つて見てゐるんだ。」

としばらく黙つてゐた薔薇がまた口を出して云ひました。

「エツ、どこに？そしてその人はあたしのやうなの？」

と、薔薇が答へました。

「印つて、どんな印なの？」

あやちゃんはふしぎさうに尋きました。

「その娘の印はたしか黒い鉄のかたちだつたよ。」

と、薔薇は云つて、

「私はお前さんの背なかに何にも附いてゐないのを、さつきからふしぎに思つてゐるんだ。私はそれがお前さんの仲間の規則だと想つてゐたのに。」

「オイ、／＼、来たよ。」

と、ふたりの話をきいてゐた金蓮花がこの時聲をかけた。

「ザク／＼砂利を踏んでくる音がするよ。」

あやちゃんは慌てゝそこら



と、あやちゃんは驚いて、ひどく熱心になつて訊きました。して見るとこの鏡の國には自分のほかにもう一人女の子がゐるのだ」と云ふ考へが胸に浮んだのでした。

「あゝ、その娘もお前さんとおんなじにぶざまな恰好をしてゐるよ。だがその娘の方がもつと赤くて、——それに花びらが幾分知かいやうだ。」

「其人いつでもこゝへ来るの？」

「大丈夫、いつでもちぎに逢へるよ。あの娘は背なかに妙な印をしよつて歩いてゐる仲間の一人なんだから。」

をキヨロ／＼見まはしますと、なんの、それはトランプの札のスペードの女王でした。

「アラ、あの人たいへん大きくなつた！」

あやちゃんはすぐさう思ひました。まつたく、さつきストーヴの



前で女王を見かけたときには、ほんの三寸ぐらゐの
 大ききしきや無かつたのが、今見ると、あやちやん
 よりも首半分だけ高くなつてゐました。
 『あたし、行つてあの人とお話してくるから。』
 と、あやちやんは云ひました。かうして花とお話
 してゐるのもすいぶん面白けれど、トランプの女
 王とお話をする方がもつともつと面白からうと考へ
 たのでした。

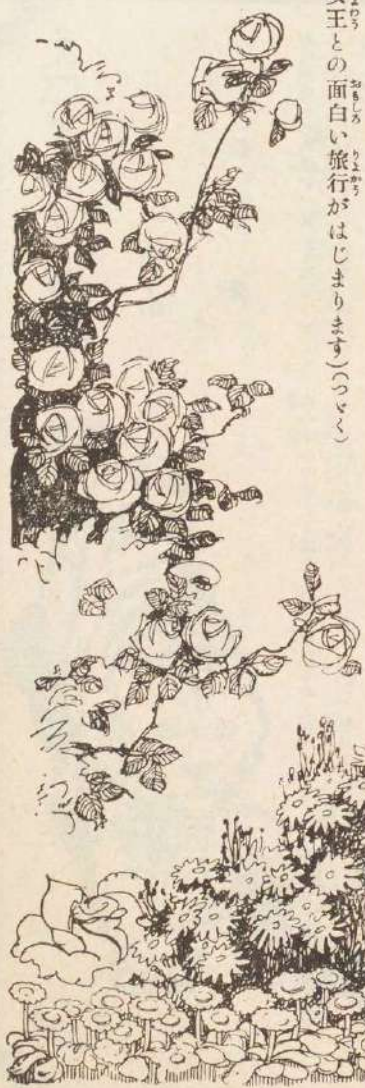
『お前さん、あの娘に逢ふ氣ならそつちの
 方へ行つちやだめだよ。』

と、薇薔が、あやちやんの歩いてゆく後
 から聲をかけました。あやちやんには薔薇
 の云つた言葉の意味がさつぱりわからな
 かつたので、かまはず女王の方へ進んでゆき
 ますと、驚いたことには忽ち女王の姿はど
 こへか見えなくなつてしまひ、自分はまだ

もやもとの家の方を向いて歩いてゐ
 るのに氣が付きました。
 あやちやんはこれにはすこし焦れ
 つたくなつてきました。それでもや
 つとがまんして立ちどまつて方々女
 王の行方を見まはしますと、今度は
 すつと遠くの方を歩いてゐる姿が眼
 にとまりました。



「さう……。こゝは鏡の國だつたわ。」
 とフト氣がついたあやちやんは今度は思
 ひ切つてあとびしやりを始めました。する
 とどうでしょう！ あやちやんの計畫はみ
 ごと成功して、一分とも歩かないうちに、
 さつきから登りたい／＼と思つてゐた小山
 の麓のところではつたりスベートの女王と
 出つておりました。(これからあやちやんと
 女王との面白い旅行がはじまります)(つづく)



支那イソップ物語

楠山正雄

狐と虎



おなかのへつた虎が、食べものをさがして、森の中をのそく探しながら歩いてゐますと、ひょっこり狐にひましました。虎はいきなり一口に狐を噛み倒さうとしましたが、狐はあわてた類もしないで、

『これ、お前はわたしを何だと思ふ。畏多くも神さまから獣どもの王を仰せつかつてゐるわたしだ。嘘だと思つたら、わたしのあとからついておいで、どんな獣でもわたしの尻が見れば、みんな恐入つて、道をよけるだらう』といひました。そのけんまくがあんまりえらさうなので、虎もつかつか釣り込まれて、

『よし、ちやあためしてやる』といひながら、狐のあとからのそくついて行きました。するとなるほど狐のいつたとほり、ふたりが歩いて行くと、獣どもはあわてゝ右に左に逃げて行きましたから、虎はいよいよ狐をえらいと思ふやうになりました。それは獣たちのこぼがつたのは虎で、狐ではないことを知ったからです。ですから自分よりえらいものの勢ひをかまに着ていばるるものごとを、虎の威を借りる狐のやうだといふのです。



鈴ぬすびと

どろぼうがお宮から大きな鈴を盗み出して、人に見つかつては大へんだといふので、鈴を背中にしよつたまゝ、一生けんめい駈け出しました。駈けるたんびに背中の鈴はがらん／＼すばらしい音を立て／＼鳴りました。どろぼうはびつくりして、自分の兩耳をおまへてまた駈け出しました。自分の耳に聞え／＼しななければ、人にも聞えないだらうといふのが、いかにもどろぼうらしい考へでせう。



太陽を追ふ男

何でも負けることの嫌ひな男が、おれは太陽と駈けくらをして見せるといつて、七月の炎天に山から谷へ通つ駈けまはつて歩きました。いちにもがまんにも喉がかわいてたまらないので、谷川に下りて、川の水をのこらすのみ干してしまひました。それでも渴きがとまらないので大酒の水をのみ干してしまひました。それからまた駈け出して、とう／＼太陽に追ひつかない内に雲をたおこして死んでしまひました。

馬賊と仙人

廣津 和郎



今でも支那には馬賊といふ、盗人の群が澤山ありますが、むかしも仲々手に負へない悪い馬賊がありました。

或日のこと、支那で名高い仙人が一人の弟子をつけて、日の暮れかゝつた山路を通りかゝりました。その仙人はこの世に並びない尊い呪文を知つてゐる

勢で、争ふにも争はれず、たうとう縛られました。が、賊は先生の仙人だけを留めてをいて、やがて弟子を放してやつて、先生の身代金を取りにやりました。が、その晩は恰度七夕の晩であつたので、弟子はそのことを深く心配して、

「私は必ず二三日の中に還つて参りますから、どうか御心配は御無用に遊して下さい。たゞくれぐれも申上げますがあの呪文をお唱へになることをお慎みなささらねばなりません。恰度折り悪く今日は七夕ですから、若し先生が苦しまぎれに、あの呪文をお唱へになつて、寶をお降らしになれば、きつと先生と盗賊との間に難儀なことが起つて参らないとも限りませんから。」と呉れくも注意して弟子は身代金を求めにそこを去りました。

盗賊共は、早速仙人を引きさて、山の奥をさして引き上げて行きました。恰度その時空は清らかに晴

といふので、世間から大層尊敬されてをりました。それは年に一度、七夕の晩にその呪文を三度唱へて、じつと空を見てゐると、星の世界から金、銀、眞珠、珊瑚などといふ寶物が數限りもなく、雨のやうに降つて來るといふのでした。

さてその仙人と弟子とが山路にさしかゝりますと、その山の奥に棲んでゐる澤山の馬賊共が現れて、無謀にも二人を捕へて了ひました。二人は多勢に無れ渡つて、お黒様が無敵にキラ〜と輝いてをり、まん圓いお月様が東の山の端から空にお昇りになりました。

仙人は我を忘れてじつとその空を見惚れてをりました時、考へれば考へる程、現在自分がこんな馬鹿な苦しみをうけてゐることが詰らなく思はれ出しました。

「あゝ今二三度呪文を唱へるとあの星の世界から寶が雨のやうに降つて來るのだがなア。それに今自分分は少しばかりの金のために、こんな非道な目に遭つてゐなければならぬとは、随分馬鹿らしいことだ。そんなことよりも、いつそのこと寶を降らせてそれで盗賊共に身代金を拂つて、自由な身體になつてやらう。」と、弟子の呉れくも注意して行つたことを、今は忘れて、

「おい〜泥棒さん、泥棒さん。」と呼びかけてみま

した。するとその中で頭らしい一人の男が進み寄つて、

「何か知らないが黙つてゐた方がいゝ。餘計な愚痴を云ふよりもその方が御利益があるせ。」と憎々しげに云ひました。

「だがね、一體お前達はなぜ私をこんなに縛つてをくのだい。」と仙人は眞面目で訊きました。

「呆けてはいけないよ、さつきもお前さんの弟子を放してやつた通り、お金が欲しいからだ。」と男は云ひました。

「ハアハ……たゞお金が欲しいだけかね、それでは今早速澤山の寶を降らせてやるからね、私を解いて呉れ、そして頭や顔を綺麗に洗つて、新しい眞白い著物を着せて呉れ、そして花を澤山集めて来て、此處を飾つて貰ひたい。」と仙人は云ひました。

頭らしい男は仲間と相談してをりましたが、やが



「お前達はこの上何が欲しいのか。」と云ひますと、泥棒共は、

「先生、お腹立ちは尤もですが、一晩でこれだけの寶を只で儲けさせて下さるやうな方は世界中で先生一人だけでせうからね。お氣の毒ですがもう四五日も先生に居ていたといたら、私共はどんなに結構か知れません。えへ……。」と變な笑ひ方をして取り



て皆に云ひつけて、仙人の云つた通りに準備をしました。

さて仙人は身體を清めて、じつと空のお星様を見詰めるながら咒文を三度唱へますと、降るわ、降るわ、金、銀、眞珠、珊瑚、金剛石などの寶物が雨のやうに降つて來るのでした。

泥棒共はその様子を見ると、目を廻さんばかりに喫驚してをりましたが、めい／＼寄つてたかつて、兩手でこれらの寶物を、掬ひ取るやうにして袋であらうが何であらうが、這入る物には皆詰め込んで、その上懲張つた奴は帽子やポケットにまで詰めこんで了ひました。仙人はその様子を見て、

「さアそれだけの寶を降らせてやつたのだから、私にはもう用はなからう。」と云つて盜賊共と別れようとする、盜賊共は尙仙人を捕へてゐて放さうとしません。仙人は大驚駭をたて、

合ひませんので、仙人は弟子が呉れ、も注意して行つたことを思ひ出して、自分が思ひ違ひしたことを、大層残念に思ひましたが今は仕方なく、泥棒共の後について行きました。

すると間の悪い時は、悪いことが續くもので、その泥棒共が更に大勢の強い馬賊に取り圍まれて了ひました。つまり仲間同志の喧嘩です。で先の泥棒は、「なせ同じ仲間私達を捕へるのですか。」とぶるぶる震へ乍ら訊きました。すると馬賊の頭は、「お前達の持つてゐる獲物が欲しいのだ。」と云ひました。で先の泥棒は、

「この寶が欲しいのですか。それならこの先生を捕へて行つた方がよろしいでせう。この獲物も先生の一睨みで空から降つて来たものですよ。」と云ひました。それで馬賊共は又仙人を生捕つて、泥棒共を放してやりました。馬賊の頭は仙人に向つて、

上にも又々喧嘩が持ち上つて、お互に切り合つた上句、お終には到頭たつた二人になつて了ひました。

その二人の者は、初めの中は仲好くして、寶物を全部森の中に隠しました。そしてやつと片付け終ると、二人はお互に顔を見合せて、

「うまく行つたね、たうとう二人のものになつて了つた。」と云へば、

「あゝ矢張り俺達の運が強かつたのだ。と云つて笑ひました。

が二人共ひどくお腹がすいてゐたので、一人は寶の番をしてゐることにして、一人が村までお米を取りに行くことにしました。そして一人が出て行くと、後に残つた男は種々と又怒張つたことを考へ出しました。

「仲間が歸つて来たら、この寶は半分取られて了ふのだ、惜しいことだ。本當に、半分取られるなんて、

「先生、俺らにも寶を降らせて下さい。前の奴のよりもつと澤山に。」と云ひました。仙人は、「これは全く面倒なことになつて来たわい。」と思ひ乍ら、

「それはお易い御用だが、寶の降る日は一年に一度だけで、來年まで待つて呉れ、は、いくらでも降らせてあげよう。」と答へますと、馬賊共は大層腹をたて、

「この嘘つき奴、前の奴等に寶を降らせておいて、俺等には降らせぬと云ふ法があるものか。」といきなり刀を抜いて、可哀想にも仙人の首を切つて了ひました。そして早速前の泥棒を追かけて行つて、その泥棒共を全部斬り殺して、寶物を奪ひ取りました。

がさて、さうして奪ひ取つたまでは好かつたのですか、その獲物の分配に就て馬賊共がお互に口論し始め、お終ひに仲間が二つに分れて争をつた上句、その半分はそれがために死んで了ひましたが、その



馬鹿々々しいことだ。それよいか、もうかうなれば破れかぶれた、貴奴も可哀想だが今の中に片付けて了へ。」と恐ろしいことを考へて、刀を抜いて仲間の歸つて来るのを待つてをりました。

こちらは村へお米を取りに行つた泥棒です。これも亦一人とぼくと歩いてゐると、そろ／＼怒つたことを考へ出しました。

『あゝして折角の寶も二つに分けなければならぬとは馬鹿げたことだ。それよいかいつそのこと仲間を殺して俺一人のものにしよう。さうだ／＼、御飯に毒を入れて、彼奴に食べさせてやれば、譯もなく往生するに違ひない。』

とこれも亦一人合點して、何處からかお米を盗み出して來て、御飯を焚き出しました。そして煮へたつた頃、自分は先に食べて了つて、その残りの御飯に毒を入れて、知らぬ顔をして持つて歸りました。

336
がその男がお釜を下すか下さない中に、番をしてゐた泥棒は隠してゐた刀で、すつぱりと首を切つて落しました。

『あゝこれで氣になるものがなくなつた。寶はもう俺一人のものだ。』

と番をしてゐた泥棒は一人ほくほく喜び乍ら、仲間が持つて歸つた御飯を取出して食べて了ひました。すると忽ち胸やお腹が痛み出して、七轉八倒の苦しみを續けました。

『あゝ人を呪へば穴二つ、と云ふが全くこのことだ。強慾は遂に身を滅すものだ。寶を降させた仙人も殺され、俺達の仲間が二組も皆死に、今俺も死んで了ふのだ。そしてあの寶も森の中で腐つて了ふだらう。』

と云つて到頭赤い血を吐いて死んで了ひましたとさ。(へはり)

笹の舟

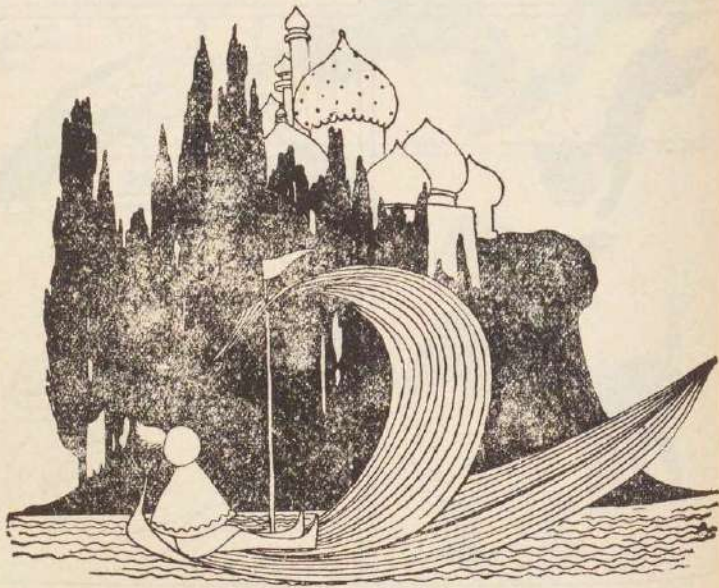
佐藤八郎

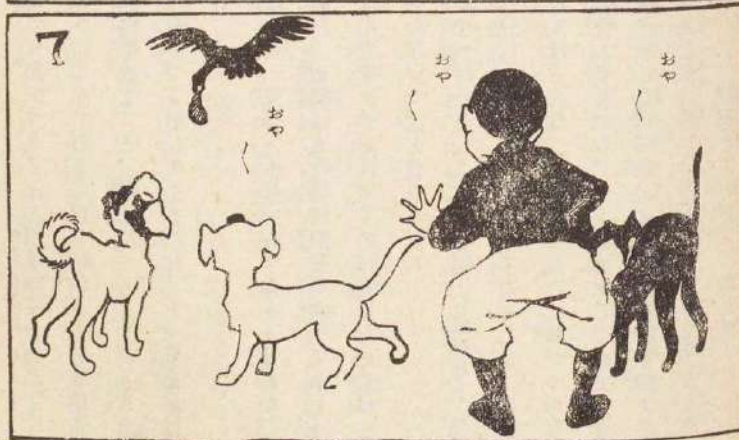
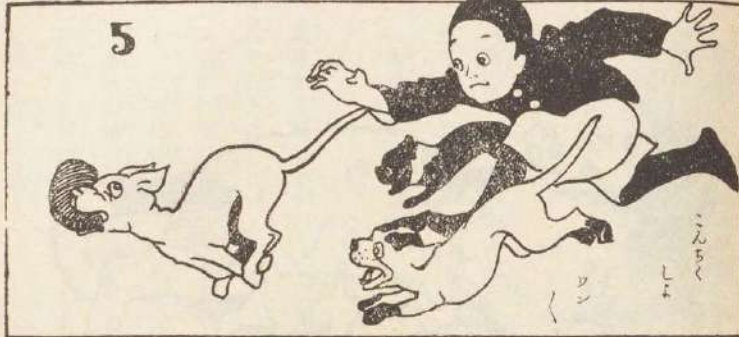
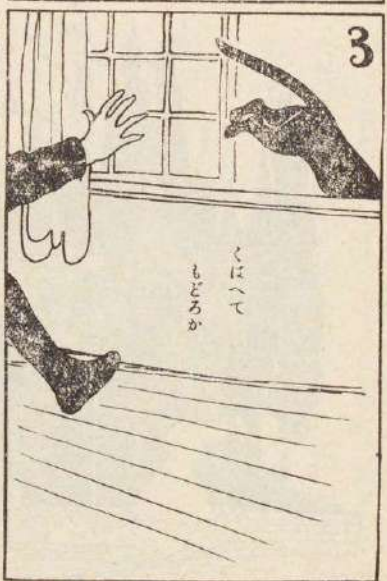
流れる流れる 笹の舟、
流れ流れて 海へ行け、
それから遠くの 島につけ。

遠くの島の王様は
皇子に別れて 泣いてゐる。

王妃様も泣いてゐる、
だから行け行け 笹の舟。

そうしてお前に 乗つてゐる
紙の王子を 差上げる、
早く行つて差上げろ。







晴雄さんと瑠璃子さんと仔猫

三宅房子

四〇
柔かい朝の日光がキラ／＼と硝子障子を透して、子供部屋にさしこんでゐました。晴雄さんと瑠璃子さんは、眼を覚ますと、寢床からちよつびり首をのばして、睨めつこをしてゐました。と、乳母がはいつて来て、

「何ですんねえ！ 見つともないちやありませんか、お子さんがた。皆様はもう朝御飯を召食つておしまひになつたんですよ。それですのにあなたがたはまだお眼があかないで。」と言ひました。

日光は室中一ぱいさしこんで、蒲團に戯れながら、子供たちと一しよに遊ばうと言つてゐました。けれども子供たちはそんなことにはでんで、気がつかないで、眼を覚ますとから、もう機嫌をそこねてゐました。瑠璃子さんは小ぢやい唇を尖らして言ひました。

「お茶……やー！ 乳母や、お茶……やー！」

ゐました。

二人の子供は箱の前にしやがんで、追つかけて来た乳母がズツ／＼小言を言つてるのも聞かないでちつと小猫どもを見つめてゐました。二人の眼は心から嬉しいといつたやうに輝いてゐました。

「まあ、可愛らしい！」と、瑠璃子さんはニコニコしながら叫びました。「まるで二十日鼠をつくりだわ。」

「一とつ、二たつ、三いつ、」と、晴雄さんは数へました。「三匹だね。あれは僕らだよ、一匹が前のだよ。それからもう一匹は他所の人にあげようや。」

ニヤ／＼と、親猫は甘へるやうに鳴きました。暫くの間、さうして見てゐましたが、子供たちはやがて、親猫の下から仔猫どもをとり出して撫で始めました。それでもまだ満足が出来ないで、しまひには寢衣の裾にくるんで、室から室へと駆け廻りま

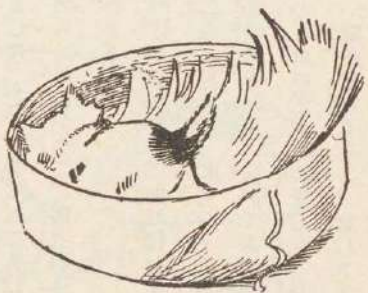
晴雄さんはしかめつ面に眼をしばたいて、何か喧嘩のたねはないかとばかり、あたりを見廻しながら、口をあけやうとしますと、そのとたんに、食堂の方から、すき透るやうなお母さんの聲が聞えて来ました。

「猫にミルクをやるのを忘れないやうにおしよ、仔を生んだんだからね。」

晴雄さんと瑠璃子さんとは急に顔を柔げてニツクリしました。と、いきなり二人はワアツと叫んで、寢床からはねあがつて、寢衣のまんま臺所の方へとんで行きました。

「猫が仔を生んだ！ 猫が仔を生んだ！」と、二人は嬉しさに叫びました。

臺所の椅子の下に置いてある小さな箱の中から、仔猫どもがのぞいてゐました。可愛らしい碧色の眼に黒い腫子を細くして、悲しさにヒイ／＼泣いて



した。

「お母さん、猫が仔を生んだのよ！」

と二人は言ひました。」

お母さんは知らない人と

話をしてみらつしやいました。お母さんは子供たちが顔も洗はないで寝衣の裾を高くかゝげてゐるのを見ると、きつと睨んで言ひました。

「寝衣をお下しなさい！ 見つともないから、言ふことを聞かないと、ひどい目にあはせませうよ！」

子供たちは、お母さんのお小言も、知らない人のゐるのもかまはず、仔猫どもを絨氈の上に置いて、耳がグワン／＼するやうな大きな聲をたて、戯れて

おました。

子供たちの側には、仔猫どもをひつたくられた親猫が哀れつぼくニヤ／＼鳴いておました。

子供たちはまもなく着物を着かへて、顔を洗つて、朝御飯を喰べたり、子供部屋に引つばられて行つたりしましたが、こんな面白くもないことから、どうかして逃れたいといふ思で一ばいでした。

やつとのことで、二人は放されて臺所へ來ると、また仔猫どもを引つぱり出して遊びました。

「ただど、どうして眼が見えないのでせうか？」と、瑠璃子さんが聞きました。「お乞食のやうに盲目なんではせうか？」

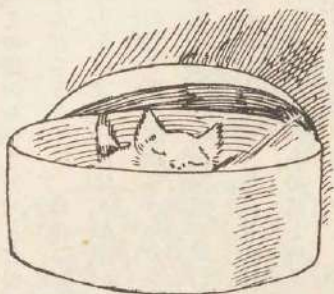
この問は暗雄さんを困らせました。暗雄さんは仔猫の片眼を開かせやうとして長い間一生けんめいにブ／＼、息を引つかけたりフン／＼、鼻で嗅いだりしましたが、みんごと失敗りました。それから

親猫が一軒々々訪ねて行くよ。」

二人はさつそ

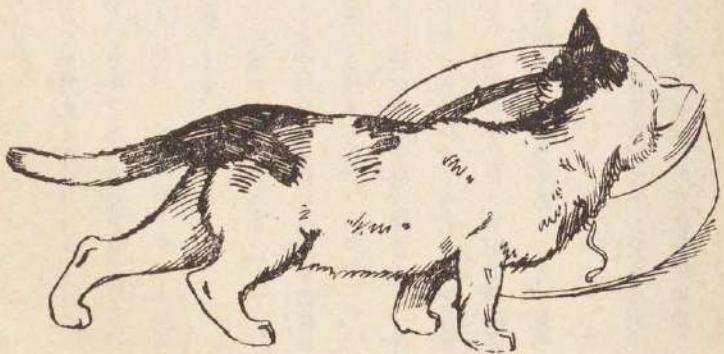
く古い帽子箱を臺所の三隅に置いて、仔猫どもを住まはせました。しかし仔猫どもは分家させるにはまだ早過ぎたのでした。

親猫は仔猫の家を一軒々々訪ねて行つては、またもとの箱へつれて歸りました。



それから子供たちはまじめになつて、仔猫どもの行末のことを心配し始めました。そして、一匹は親猫を慰めるために家において、一匹は田舎のお家に入り、もう一匹は鼠をとるために、物置におくことにしました。

「仔猫どもにお家を拵へてやらうよ。」と、暗雄さんが言ひました。「一匹づゝ異つたお家をね。さうすると



「この猫がお母さんなんだね。だけど誰がお父さんなんだらう？」と、晴雄さんが聞きました。

「さうね、誰がお父さんなんでせう？」

晴雄さんと瑠璃子さんは、誰が仔猫のお父さんなんだらうといふ問題で、しばらく言ひあつてゐましたが、とうとう尻尾をむしりとられた茶つばい馬にきめました。その馬といふのは、梯子段の下の物置部屋に投りこまれてゐるのでした。二人はさつそく物置部屋から尻尾をむしりとられた茶つばい馬をとり出して来て、猫の箱の傍に立たせました。

「氣を付け！」二人は馬に向つて言ひました。「そこにある仔猫どもがどんなことをするか見おゐで！」かうして二人は一心に遊び戯れてゐました。

お午飯前に、晴雄さんはお父さんの書齋に仔猫を引つばつて来て、お父さんの卓子の上を這はして、時々鉛筆の先で鼻をついついたりして熱心に見守つ

てゐました。

と、不意にお父さんが見えました。

「何だこれは！」と、お父さんは仔猫を見るなり、どなるやうに言ひました。

「あの……ああ仔猫ですよ、お父さん。」

「こゝへ仔猫をもつて来いと誰が言つた。」

お父さんはすぐと女中にいひつけて仔猫を書齋からおつ投り出さしてしまひました。

お午飯の時でした。皆が御飯を喰べてゐると、仔猫の鳴聲が聞えました。皆はびつくりして眼をキョロ／＼して、あたりを見廻しました。やがて瑠璃子さんが前掛の下に仔猫をかくまつてゐることが見つかりました。

「瑠璃子！ 室から出て行くんだ！」お父さんが、腹だ／＼しさうにどなりました。「その仔猫を溝の中へ投げこんでおしまひ！」



晴雄さんと瑠璃子さんはびつくりしました。溝の中で死なしてしまへば、——親猫や木馬から子供を奪ひとつてしまはなければならぬし、箱をからつほにしなければならぬし、それから、仔猫どもが大きくなつたら、それ／＼かたづけやうといふ美しい未來の計畫をすつかり壊はしてしまはなければならぬ。——そんなことを考へて、二人は大きな聲をたて、泣きました。そして一心に仔猫どものために、お父さんにお慈悲を願ひました。おかげでやつと、仔猫は許されることになりました。でも二人はもう臺所へ行つたり、仔猫にさはつたりしてはいけないてうことになりました。

御飯がすんでから、晴雄さんと瑠璃子さんは室から室へとしよげながら歩いてゐました。お母さんがお菓子をお出しになつても、いらなしいといつて、口答したりしてゐました。

夕方、よその小父さんが見えました。二人は小父さんを引つばつて来て、

「小父さん、仔猫を子供部屋へ入れるやうにお母さんに頼んでちやうだい。ねえ！」と、いつて泣くやうに訴へました。

「よし／＼」といつて、小父さんはこゝろよく聞いてくれました。

小父さんは、ひとりで來ることがめつたにありませんでした。ステッキのやうに固い尻尾をしたクロといふ黒犬が、いつもついて來ました。クロはむつつりやで、ひとりで威厳をつくつて、子供たちが傍にゐやうものなら、まるで椅子かなんぞのやうに思つて、その固い尻尾をどん／＼ぶつつけて行くのでした。で、晴雄さんでも、瑠璃子さんでもひごろからひどくクロを嫌がつてゐました。ところがその日に限つて、晴雄さんは眼を大きく見開きながら言ひ

「奥國！　クロが、仔猫を皆喰べてしまひました。ガツ／＼喰べてしまひました。」と、息せき／＼言ひました。

晴雄さんと瑠璃子さんとは、しばらくぼんやりしてゐましたが、急に室中グワンとするやうな大聲をたて、泣きました。

それでも子供たちは、家中の人がびつくりして飛んで行つて、クロを引つばいたり、打ちのめしてくれるだらうと思つてゐましたが、お父さんやお母さんは、ひどく豪氣な奴だなアといった風に、顔見あはして笑つてゐらつしやいました。

クロは尻尾をふりながら、満足したといふ風に、舌を甜めてゐました。たゞ親猫ばかりは悲しさうにニャー／＼鳴きながらうろ／＼してゐました。

「さあ、子供たち、もうお寝み、十時だよ。」と、お

ました。

「瑠璃子、馬の代りにクロをお父さんにしようよ！馬は死んでるだらう。だけどクロは生きてるものねえ！」

「あゝ、それがいゝわ！」と、瑠璃子さんは手をうつて喜びました。

夕方中、二人はクロを臺所へ引つばつて行く隙はないかと思つていら／＼してゐました。ちやうどお父さんは骨牌をおやりになり、お母さんはお湯をお沸しになるので、子供たちから、眼をはなされる時が參りました。

「さあ！」

と、晴雄さんは瑠璃子さんの耳に口をあてゝさゝやきました。

ところがちやうどその時、女中の竹やが駈けこんで來て、



母さんに言はれて、晴雄さんと瑠璃子さんとは、むりやりに寢床に引つばられて行きました。

寢床にはいつてから、二人は、むごたらしいそして汚らしいクロを恨みながら、仔猫どものためにまた泣きました。(なほり)



小人の果物

多田園子

ある所に、綺麗な水の流れて居る谷川がありました。毎日夕方になると、仲よく水汲みに来るロウラとリヂイといふ姉妹がありました。姉妹が水汲みに

なつて、いつもの様には、氣味が悪いとも思はず、夢中になつて、其の聲の方へ歩いて行きました。

向ふから綺麗な果物のはいつた籠を抱へて、果物賣りがやつて来ました。見るとそれは、胴から下は人間の體ですが、頭は鳥の様な鳥の様な、何とも云へない氣味の悪い嗜好をして居る小人でした。ロウラはいつもなら喫驚りする筈なのに、其の日は何故か、其の果物を見たら、それを食べて見たくて堪らなくなりましたので、其處に立つたまま、其果物を一心に見詰めて居りました。ロウラは其時、お金を一文も持つて居ませんでしたから幾らほしくてもそれを買ふ事は出来ないと思つてがっかりして居ました。すると小人はそれを察して、かう云ひました。「お嬢さん、貴嬢は大變に美しい髪を持つておいでです。お金はいりませんから、其の髪の毛を一本お

四八

来る度に、何處からともなく「果物をお買ひなさい。果物をお買ひなさい」と云ふ聲が聞えて来るのです。けれども、其の果物は大變毒な果物だから、食べてはいけない、と云ふことを、姉妹は誰からも聞かなければど知つて居りました。

「ねえリヂイ、私達はお金があつてもあの果物を買つてはいけないのよ。あの聲を聞くだけでもよくないのよ。だから耳をふさいで居ませうよ。」と姉のロウラは云ひました。

「え、ほんとに氣味がわるいのね。私恐いわ。」さう云つて姉のリヂイも耳を塞ぎました。

ところが或る日の夕方、姉のロウラは妹をつれずになつたひとり、川へ水汲みに行ききました。するといつもの様に、どこからか、

「果物をお買ひなさい」と云ふ聲が聞えて来ました。ロウラは其の聲を聞くと、急にそつちへ行つて見たよこしになれば、此の果物を好きなだけ買つて上げます。」

ロウラは喜んで、直ぐ様自分の髪の毛を一本抜いて小人に渡しました。そして果物を思ふさま食べる事が出来ました。それからみんな食べて仕舞ふと、ロウラは水を汲んでいそ／＼として家へ歸つて来ました。

姉のリヂイは姉さまの歸りがあんまり遅いので、心配して門まで姉さまを迎ひに出て居ました。そして、怪物にさらはれでもするといけないから、夕方はなるべく早くお家へ歸つて下さいと云つてたのみでしたが、ロウラはそんな妹の云ふ事などは、耳にも入らない様にそわ／＼して、あの果物の甘しかつた事許りを考へて居りました。

其の翌日は姉妹一緒にそろつて、また水汲みに出かけました。ロウラは水を汲んで仕舞つても、なか

四九

なかに歸らうとしません。妹のリヂイがいくらすゝめて見ても、頼んで見ても、「今日も果物を食べないうちには歸らない。」と云ひはつて、どうしても歸りさうにもしません。そして、果物賣りの聲が聞えはしないかと思つて耳をすましたり、昨日来た方からやつ



て來はしないかと思つて目を腫つたりしますけれど、聲も聞えないし、出て來さうもありません。それなのに、妹の耳には其の果物賣りの聲がいつもの通りに聞えて來るではありませんか。ロウラは妹には聞えて、自分にだけ聞えないのを、不思議に思ひ、大變悲しかりました。けれども、それからは少しも其の果物賣りの聲がロウラには聞えて來なくなりました。ロウラはどうかして其の聲を聞きつけて、もう一度あの甘しい果物を食べて見たいと思ひ續けて居ました。

其のうち、日がたつにつれて、ロウラの様子がだん／＼變つて來ました。房々として居た髪の毛は薄く抜けて眞白になつて仕舞ひますし、美しかった顔や體もみる／＼瘦せ衰へて行くのでした。ロウラはふと、いつか果物を食べた時に、種子を一つ持つて歸つて來た事を思ひ出して、南向きの日當りのい

野の際へそれを植えて、朝晩自分の涙をかけてやりました。けれど幾らたつても一向芽を出す様子もありません。ロウラはもうすつかり元氣も何もなくなつて仕舞つて、只毎日々々果物を食べたい事許り考へ續けて泣いて居りました。

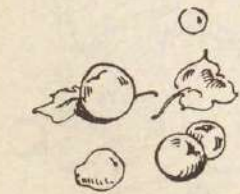
妹のリヂイはそれを見て、悲しくて悲しくて堪りませんでした。どうかして姉さまの病氣を治して上げたいと思つて、どうしたらよからうかと、いろいろ考へて居ました。すると此の時、又いつもの果物賣りの聲がどこからともなく聞えて來たのです。

『おゝ氣味が悪い。』とリヂイは思ひました。が、直ぐ又リヂイは考へなほしました。『姉さまは毎日々々あんなに果物を食べ度い食べ度いと、云つていらつしやるのだから、氣味が悪いなんて云つて居る時ぢやない。姉さまは今にも死んでお仕舞ひなさるかも知れないのだから。さうだ、さうだ、姉さまにあの

果物を買つて來て上げよう。あの果物賣りに近寄つてはいけないと云ふ事だけれども、私はどうなつてもかまはない。姉さまの命には代へられないのだから。』さう思ふとリヂイは直ぐ自分の財布の中へ銀貨を入れて、果物賣りの聲の聞える方へと駆け出してゆきました。

『其の果物を私に賣つて下さい。』リヂイは果物賣りを見付けると、直ぐかう云つて銀貨を渡しました。そして果物賣りから果物を受取り取ると、急いで歸らうとしましたから、果物賣りは周章とめました。

『それは家へ持つて歸つたりしてはいけない。直ぐ此處でみんな食べて仕舞はなければならぬ。』と云ひます。それを聞く



をして、

『でもこれは私が食べるのではないの、家に姉さまが病氣びやうきして寝ておいでだから、姉さまに買つて行つて上げるのです。』と云ひました。それでも小人の果物くだもの賣りは、何が何でも、此處で食べて仕舞はなければいけないと云つて承知しやうちしません。

『そんならもういらぬから、お金を返して下さい』と、リヂイは泣き出しさうな顔をして云ひました。ところが小人は急に恐しい顔をして、いきなりリヂイに掴みかゝつて來ました。そして無理やりに果物をリヂイの口に押し込め様とします。それでもリヂイがそれを食べまいとして、口を塞いで居るものですから、小人は怒つてリヂイを打つたり、つねつたり、突きとばしたりしました。それでもリヂイは固く口を塞いで居ましたので、小人はたうとう疲れて仕舞つて、銀貨をリヂイに投げつけると、果物を皆



な其處へぶちまけた上、散々に蹴ちらかして、風や雲に乗つて河や地面の上を目茶苦茶に走つて、どこかへ行つて仕舞ひました。

小人の果物賣りの怒り方が、あんまり大變なものですから、リヂイは暫くあつげにとられて居ましたが、纏て自分にかへつてよく見ると、自分の體も顔も果物の汁でびつちよりになつてゐました。

リヂイは其の儘大急ぎで家へ走つて歸りました。そして、

『姉さま、姉さま、早く私の顔や體について居る果物の汁をお吸ひなさい。』と云はうとして、まだおしまひまで云つて仕舞はないうちに、姉さまのロウラは、妹が自分の爲めに、果物を買ひに行つて呉れたものと思つて、嬉しさのあまり、駆け寄つて妹の手を取り、泣き乍ら、

『有難う、有難う。』と云つて妹の顔や妹の着物に、

幾度も幾度も接吻くちんしました。すると其うち、妹の顔や着物について居た果物の汁が、ロウラの口にはいと、不思議にもロウラは其の儘氣を失つて、其處へ倒れて仕舞ひました。リヂイは喫驚りして仕舞ひました。どうしていゝか分らないので、一晚中姉さまの體を抱へた儘泣き通しました。すると又不思議なことには翌朝になつて見ると、姉さまが生きかへつて居るではありませんか。不思議はそればかりではなく、あんなに白くなつた髪の毛が、もと通りに濃く房々として居るし、あんなに瘦せ衰へて居たのもすつかり治つて、生き〜と輝く様になつてゐるではありませんか。

それを見てロウラ自身も、妹のリヂイも、どんなに喜んでか知れませんでした。そして翌日の夕方からは、また姉妹で仲よく水汲みに出かけてゆくのでした。(をはり)



その第一番に笑はせた者にお怒りを下さる」といふ意味の事が、認められてあるのでございまして。

「ほう、これはおもしろい、俺も一つ、そのお仲間入りをして、この茸を持出してやらう。」

幸ひまだ捨てずに持つてをりました例の茸を携へまして、御領主様の御殿を訪ね、

「私は、はい、天下第一の料理人でございませうが、私の料理なめしあがつた方で、お笑ひなさる方ばかりませぬ。どうか一つおため

しな願ひたう存じます。」と申し出でましたので、早速おためしになりますと、お姫様は、一口食しあがると、もう、にっこり遊ばし、二日目にはにっこり、お食事を済されました時には、

「やっつきやう。」

と笑ひ興じられました。

御膳食とあつて、並居る御殿の者皆案を下していたゞきましたが、それも次第に笑ひ初め、

「お姫様おめでたい。あつはつはつはつ、おつはつはつはつ、えつへつへつへつ、うつふつふつ、いっひつひつひつひつひつ。」

と、賑やかに笑ひ轉げるのでございました。何せ、めでたい珍らしい料理だといふので、其後御殿の料理番が調味の具合をたづねました。

けれど、采助は、秘傳だと誓つて話しませんでしたから、確かな事はわかりませんが、今も稀にある笑草といふのが、それだらうといふことではございませぬ。(箱登の話)



諸國傳説童話

藤澤衛彦



笑ひ茸

幸助は、少しおめでたい方でしたので、何時からともなく、采助々々と呼びならされてをりました。ところがこの采助のお人好も、人血に成長しまして、いよいよ世の中へ出て出世の緒を握さうといふ時期がまゐりました。

彼が、なつかしい故郷を後にして、的もない旅路に上りましたのは、彼岸の初めで、唯々、人山の中をよら／＼と歩んで来ますうちに、日

がとつぷりと暮れてしまひましたので、據るなく、とある樹の下に宿を定めて、いさ一休みと足を伸した指先に、何か柔かに觸れるものがありますので、何であらうと起きて見ると、数十茎の茸でした。

ちようとお腹が空いてゐた折でしたので、採つて、杖火に炙り、先づ二三本食へましたところ、いふに言はれない好い氣持になり、頻りに笑ひ出したくなつて来ました。それが、止めようと思つても止まらない程をかしいので、

「はつはつはつはつ。」

と笑ひ出しましたが、それから一切夢中で、一晚中舞ひ躍りながら、里の方に出てまゐりました。

ふと氣が付いて見ますと、とある辻に、大勢の人が集つて、がや／＼何か見てゐますので、采助も覗き込んで見ました。其處には立札があつて、文面は、

「此國の領主のお姫様は未だ笑はれた事が無いので、お怒りを笑はせた者があつたら、



悪龍の閉口

馬場孤蝶

三
お腹の空つた人間には何んな路でも遠いのですしそれに、スタンには、自分ばかりか、百人の食ひしんばうの小兒たちの爲めに、食ひ物が見付かるか何うだかといふ心配が、絶えず心のなかにあるのでしたから、道が容易に、はかどりませんでした。

スタンは何處までもさまよつて参りまして、たうとう、有る物が無い物へと混り合つて居る世界の端へと来てしまひました。すると、一寸先きの所に、羊小舎があつて、中に七匹羊が居り、それから又少し先きの樹の影には、あとの羊の群が臥て居るのが見えました。

スタンは、その羊のうちの幾匹かをこつそり欺まして誘き出し、自分の家の方へと追つて行つて、食ひ物にする事に行きさうなものだと思つて、密にその家の者どもの爲めに食ひ物を得ることの能きる場所ではないことを知りました。

スタンは、固より龍のやうな、強い怪物と戦ふことなどはとても能きる事ではないとは知つて居たの

の羊小舎の傍へと忍び寄りましたが、直きにそんなことはとても駄目なのが分りました。夜半頃になりますと、何か激しく飛んで来る音が聞えまして、空を恐しい形の龍が飛んで來まして、牡羊と牝羊と仔羊を一匹づつと、その傍に臥て居ました良い牛三匹とを追つ立て、何處へか伴れて行つてしまつたのです。その龍はその外に、七十七匹の牝羊の乳汁を絞つて持つて行つてしまひました。その乳汁は龍の年老つた母親にやる爲めでありまして、その母親はその乳汁でお湯を立て、それに入ると、身體が再若くなるのでありました。で、さういふ風に、龍が羊や乳汁を取つて行くことが毎晩のことなのでした。

飼羊者はそれを歎きました。それは何の役にも立ちません。龍は唯笑つて、取つて行くだけを取つて行くきりでした。スタンは、其所は自分が自分の



ですが、それでも、家には食ひ物が無くつて困つて居る小兒が大勢居るといふ考が、何しても心のなから、離れてしまはなかつたのですから、たうとう、スタンは、飼羊者に向つて、「私が龍が來ないやうにしてあげるが、さうしたら、お前さん私に何れだけの禮をしますね？」と、掛け合ひました。

「三匹の牡羊に就て一匹宛、三匹の牝羊に就て一匹づつ、三匹の仔羊に就て一匹づつの割で、お禮をします」と、飼羊者が答へました。

「いや、旨い儲け口だね」と、スタンも云ひました。勿論、スタンにはその時には、自分が假りに龍に勝つことができたとしたところで、そんな多くの数の羊や仔羊をば何して家へ追つて歸ることが能きるものだから、その見當は更について居なかつたのでした。けれども、そんな事はいよく、その時になつて極めることにして宜かつたのです。差し向きのところ、

四

空に激しく飛ぶ音が満ちて、龍が飛んで通らうとしますと、スタンは「止まれ」と、大聲で怒鳴りました。

「おやッ。貴様は何者だ。貴様は何處の者だ」と、龍は振り返つて叫びました。

「俺はスタン・ボロオヴァンといふ者で、夜は夜通し岩を食ひ、晝は山の花を食つて、生きて居る人間なんだぞ。貴様が此の羊に指でもさして見ろ、俺は貴様の脊中に十字架を切り抜いて呉れるぞ」

スタンのさういふ言葉を聞きますといふと、龍はこれは手剛い奴に出逢つたものだわいと思ひまして、路の真中でちつとして立つて居ました。

「でも、お前は先づ俺と戦ふのだらうな」と、龍は慄へ聲で云ひました。一體、龍などは、本當に此方

夜はもう間がなかつたので、スタンは、龍と戦ふには何うすれば一番宜いのか、それを考へなければならなかつたのです。

丁度真夜半になりますといふと、生れてからこれまでまだ一通も覺えないやうな奇異な心持がスタンの心に起つて來ました。その心持といふのは到底言葉では表はすことの能きない、何とも云へない心持でした。スタンは龍と戦ふ氣は全くなくなつてしまつて、一番近い路を駆け出して、家へ歸り度くなつたのでした。スタンは、もう少して、家の方へと逃げ出すところでしたが、その時、食ひ物なしで居る小兒たちのことが、頭の裡へ出て來ました。で、スタンは、踏み止まりました。

「貴様が勝つか、俺が勝つか、何方かのところまでやるぞ」と、スタンは心のうちで云つて、羊の群の縁のところ、突立ちました。

から向つて行けば、決して勇敢なものではなく、可なり臆病な者なんです。

「なに、俺が貴様と戦ふ。貴様なんぞは、俺が一息で吹き殺してしまへるんだ」と、スタンは答へまして、身體を踏めて、脚本にあつたチーズの大きい塊りを取り上げて、斯う云ひました。「川へ行つて、此れと同等じやうな石を拾つて來いよ。吾々は直ぐ法力競べをやつて、何方がエライか極めてしまはうぢやないか」

龍は、スタンから云はれた通りに、その邊の小川へ行きました、白い石を持つて來ました。

「貴様のその石から貴様はバター乳汁を搾り出すことが能るかやつてみる」と、スタンが云ひました。

龍はその石を片手で拾ひ上げて、ぎうと握りますと、石は粉々に砕けましたが、乳汁は少しも出て來ません。これはその筈です。

「勿論、能きる譯のない事だ」と、龍は大分怒つた聲で云ひました。

「いや、貴様にやア能きんでも、俺にやア容易く能きるんだ。見ろ」と、云つて、スタンが、チーズを握り締めますと、此れは勿論指の間から乳汁がボタボタとこぼれました。

龍は、それを見まして、此れは大變な奴に出逢つたものだ、これでは三十六計逃ぐるに如かずと思ひまして、逃げ腰になつたのですが、スタンは隙かさず、龍の行く手に立ち塞がりました。

「此れまで貴様が此所でした事に就て、まだ少し貴様に用があるんだ」と、スタンが云ひますと、龍は、これは悪くすると、スタンに一息で吹き殺されて、山の野へ埋められてしまふかも知れないと思ひましたので、全く慄へあがつて、動き得なくなつてしまひました。



「何うです。物は相談だが、君はなか／＼役に立つ人間だ。所で、僕の母親は君のやうな人を雇ひ度がつて居るんだがね。何うです、三日程勤めてみてくだらないかね。尤も、僕の方の三日は、君たち人間の方の一年に當るんだがね。さうすりやア母親からは君に一日に就き、金貨の一杯入つた袋を七個づつ上げることになるんだがね」

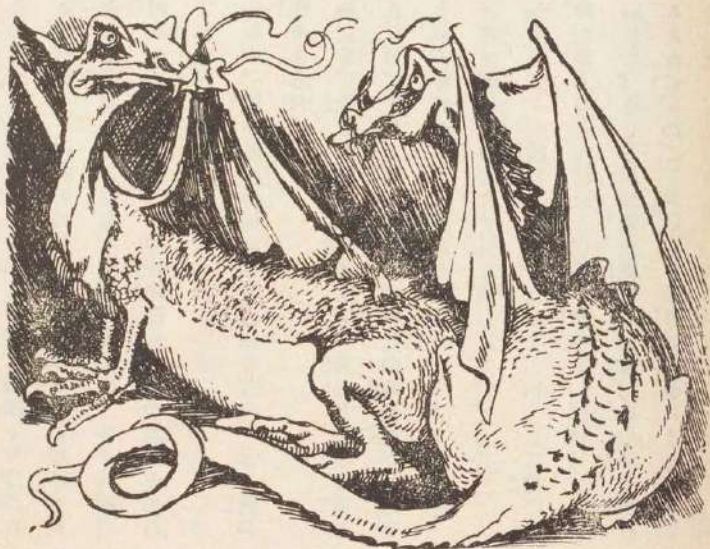
金貨の一杯入つた七袋を三倍しただけ貰へるといふのです。此れは何うにも堪へられない旨い相談で

頭いて見せました。で龍と共に龍の家さして出かけました。

が、其所までは長い、長い路でした。けれども、その果に達して龍の年老つた母親が、龍の歸へり待ち受けて居るところへと、行き着きました。スタンには、龍の



はありませんか。スタンはとても堪へて居られませんでした。スタンは其上もう言葉を費さずに、龍に向つて唯點



の母親に奉公することになりました。翌日になりますと、龍の母親は、龍とスタンと何方が力が強いか、力競べをしてみろと、龍に云ひまして、鐵で七度巻いた恐ろしい大きい棒を壁から取り下しました。龍は、その棒をば、まるでそれが羽毛でも出来て居たかのやうに、軽々と取り上げまして、頭の上でそれをぶん／＼振り廻して置いて、一寸とそれを投げますと、それが三哩程先きへ飛んでしまひました。龍は、「何うだ。俺よりもつと遠くへ棒を投げる事が能きるか、やつてみる」と、スタンに云ひました。スタンは龍と一緒に棒の落ちて居るところまで行きました、跳んで棒に手を附けて、大凡その重量をみてみましたが、スタンは慄然として、これは大變だと恐れてしまひました。その棒の重いこと、云つたら實に非常なものでした。スタン自身では勿論の

母親の眼がランプのやうに輝つて居るのが、遠くから見えました。そして、家へ入りますと、乳汁の一杯入つて居る大きい釜が火の上にかゝつて居ました。年老つた母親は、龍が何も持たずに手ぶらで歸つて来たのを見ますといふと、甚く怒りましたが、その時には、母親の鼻の孔から火や焰が吹き出るのでした。が、母親がまだ何も云はないうちに、龍はスタンの方へ振り向きまして。『此所で少し待つて居てください。母親に一通り話をしますから』と、龍は云ひました。スタンは、そんな所へ来たことをもう甚く後悔して居ました。けれども、もう其方へ来た以上は、もう何うにも、何んな事があらうとも、平氣な風でそれに當つて、怖れて居る様子などは、振りにも見せぬやうにするより外、し方がないのでありました。

五

龍は母親



の傍へ行くや否や、「ねえ、母親さん。私は彼奴を何にかしてやつ、けてしまふ爲めに此處へ仲れて来たんです。彼奴は、岩を食つて生きて居て、石の中からバタ乳汁を搾り出すことの能き恐しい奴なんですよ」と、云ひました。それから、その前の晩あつた事を残らず母親に話しました。

すると母親は「あゝ、宜しい。彼奴の事はすつかり私に委せてお置き、私はまだ此れまで、人間ならば、何んな奴だつても、取り逃したことはないんだからね」と、云ひました。さういふ風で、スタンは、龍の家に止まつて、龍

こと、家に居る百人の小兒と一緒に總掛りになつたところで、その棒を地から持ち上げることだけでも能きる譯のものではありませんでした。スタンはい、何うしようも無くつて、少時茫然と立つて居るのみでした。

「おい、何うした。何をして居るんだい」と、龍が訊きました。

「いや、餘り立派な棒なんで、感心して見て居るんだ。だがね、斷つて置くが、此の棒を俺が投げるに氣の毒だが、君の生命が無くなつて了ふせ」と、スタンが云ひました。

「そりやア一體何ういふ譯だね？ 何うして俺の生命が無くなるんだ」と、龍が訊きました。

「いや、まことにお氣の毒だが、俺が此の棒を投げるとね、それこそ君はもう明日の太陽さまを見ることは能きなくなるんだ。俺が何れ程力が強いが、君

はまだ知ら無いだらう」と、スタンは、眞顔で云ひました。

「なアに、そんなことは何うでも宜いんだ。さア、ぐづぐづせずに、早く投げろよ」と、龍が急ぎ立てました。

「君が實際本氣でさう云ふんなら、此れから行つて、先づ三日間たらふく飲んだり食つたりしようぢやアないか、さうすりやア、兎に角、此の世の中に君が後三日間だけは生きて居ることが能きる譯になるんだからね」

スタンが、如何にも落ち着き拂つてさう云ふもので、すから、龍もスタンの云ふ程の事が實際あらうとは信じませんでしたけれども、それでも何だか少し怖くなつて來ました。其所で、龍はスタンと一緒に自分の家へ引つ返へしまして、母親の臺所にしまつてあつた食ひ物を残らず持ち出して、又、棒の置い



六四

てある所へとやつて來ました。

すると、スタンは、その食ひ物の袋に腰をかけて、黙つて、丁度その時山の端へ落ちかゝつて居る月をちつと見詰めて居りました。

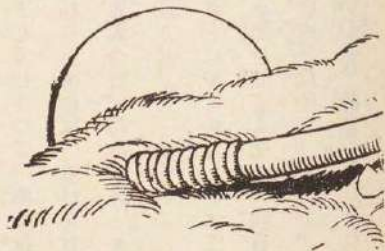
「おい、何をして居るんだ？」

と、龍が訊きました。

「月が邪魔になるんで、あれの落ちてしまふのを待つてるんだ」

と、スタンは答へました。

「それは何ういふ譯なんだい 俺にやア一向解らないんだが」



と、龍が不審さうに云ひました。

「君は、頭が鈍いちやアないか。見給へ、彼の通り、俺が棒を投げようと思ふ丁度その筋に、月があるぢやア無いか。それで、俺は月の落ちるのを待つて居るんだよ。だが、君が構はんといふんなら、勿論、俺は月の中へ棒を投げ込んでしまふんだが、何うだね。」

スタンが、さう云ひますのを聞くと、龍が更に又心配しました。

その棒といふのは、龍の祖父さんから傳はつたもので、龍に取つてはなかく、大切な品であつたので、すから、スタンの云ふとほりが若し眞實で、それをば月の中へ投げ込んで無ぐされて了つては大變だと思つたのでした。

龍は少時考へて居てから、斯う云ひました。「では兎しい。吾棒は投げないでもいゝよ。僕がも

六六

う一度投げて、それで済ますことにする。なに、それでも同じなんだ。」

スタンは、

「いゝや、それはいかんよ。俺はどうしても、月が落ちてしまふまで待つて投げる」

と、云つて肯、さんでした。

龍は、スタンに棒を眞實に投げ無くされてしまつては大變だと、全く持て餘ましてしまつて、棒を投げることを思ひ止まつて呉れさへすれば、それだけの酬いをスタンにするからと云つて、いろ／＼とスタンを説きなだめました。

で、到頭、金貨を七袋スタンにやるからといふことにして、棒を投げることを思ひ止まらせて、龍自身もスタンの代りにもう一度棒を投げて、それで、その勝負は龍の負けといふことで、済ましてしまひました。(つゞく)

太閤様の猿

(推 薦)

益田 一郎



だが、實際似てゐるものを似てゐないと嘘をつくわけにもいかないので、何と返事したものかと暫く考へてゐました。その内、ふといゝ智慧が、出たと見えて、

「いえ、似てをりません」

と、きつぱり言ひました。

「なに、猿に似てゐないといふのか」

「さやうです。猿には似てをりませんが、猿が幸とあなたに似てをります」

秀吉はがっかりした事せう。どつちが似てゐたつて結局同じことです。しかし、なかく、負けてゐ

六七

むかし、太閤秀吉のお傍には曾呂利新左衛門といふ頓智で名高い人がついてゐましたが、あるとき、太閤様はいつもの悪戯好きから、新左衛門を一つ困らせてやりたいと思つて、不意に、

「おい、新左衛門、世間では私のことを猿に似てゐるといふが、それは本當か」とききました。これには流石に頓智のたけた新左衛門も閉口して了ひまし

るやうな秀吉ではありませんから、
「それでは新左衛門、余に似た猿をさがし出して連れて来い。一と月の暇をやるぞ」といつて、早速千圓の金をやつて、新左衛門を屋敷から出してやりました。新左衛門はとんだことになつて了つたので、後悔しましたが、主人の命令ですから行かない譯にもいかないで、丹羽の山の中へでも行かう、さうしたら見つかるだらうと、たかをくくつて出て行きました。

さて行つて見ると、さう容易く秀吉に生寫しの猿がめつかるものではありません。まさか木にゐる猿を生けどる譯にもいかなので、山の中の村をあつちこつちと歩廻つては、猿の飼つてある家を見て歩きました。しかし、眼が丸くて、顔が少し赤くて鼻があんまり低くなく、耳が相當に大きくて、丁度秀吉の鬚そのまゝの猿はなかく見當りませんでした。てしまひました。そこで、物好きな秀吉は、その白猿に五百石といふ人間でもなかく貰へないやうな莫大な世話料をつけて、新左衛門に預けることにしました。

この猿は大變な利巧者でした。人の言葉がよく解ると見えて、秀吉が何かいひつけると「キヤツ、キヤツ」と妙な聲を出しては、のこ／＼歩いて行つて何でも用を足しました。で、いよ／＼秀吉の氣に入つてしまつて、ためしに小さな竹刀をこしらへて猿にやりました所が、猿でも大變にうれいものと見えて、毎日それ



をかついではお座敷の中を駆け廻つてゐました。その内に、悪智慧にたけた猿のことですから、ただ持つて歩くだけでは面白くないと見えて、若侍たちの剣術のお稽古をすつかり見習つて、秀吉のところへあいさつに来るお大名たちの傍へ行つては、ボカボカ頭をなぐつて歩くことを覚えてしまひました。秀吉は大名達が猿にボカ／＼やられてゐる滑稽な姿を見るのが面白くてたまらないので、誰でも自分の所へあいさつに来る大名があるたびに、秀吉の方から催促して「おい、猿、猿」といつて呼びつけました。すると、猿のやつ「キヤツ、キヤツ」と妙に

六八
た。さうしてゐる内に丹後の興謝の郡の山の中まで来ましたところが、その獵夫の家に長年飼つてゐる白い毛の猿が、新左衛門のさがしてゐる猿に似てゐるといふ事を聞きこんだので、新左衛門は大喜びですぐさま行つて見ました。猿は破家の縁先きに獵夫と二人で日向ぼっこをしてゐましたが、成程よく秀吉に似てゐました。全く生寫しといつてもいい位なので新左衛門はほく／＼して、
「まことに申兼ねたが、この猿を二百圓で譲つて下さるまいか」といつて、たうとう無理やりに獵夫からその猿をもらひ受けて戻つて来ました。

二

新左衛門は大急ぎで大阪城へ歸つて来ましたが、すぐと秀吉のお目通りへ出て、連れて来た猿を出しますと、秀吉はつく／＼と見てゐましたが、「成程、自分に似てゐる」といつて、すつかり感心し

嬉しうな聲を出して、チヨコ〜とんで行つては遠慮會釋なくボカ〜やるのです。加藤清正はじめ福局、片桐、池田などの名將たちは何れもひどい目にあひました。無禮な奴だと怒つて見ても、獸のこゝろではあり、それに秀吉に生寫しで特別に可愛られてゐるのですから、どうすることも出来ないのです。大阪城へ来たお大名たちは一人残らず猿に頭をたゝかれました。

ところが、青葉山中納言といふ人がありました。明日はいよ〜秀吉のところへ御氣嫌伺ひに行かなければならない事になつてゐましたが、行けばどうしても猿になぐられなければ歸れませんから口惜しいものだと思つて、何か巧い工夫はないかといろいろ考へてゐました。その内にふと思ひついた事があるたので、その日の午後、新左衛門のところへ出かけて行つて、

ガーンといふは、驚つて、漸くのことに兎の檻へ縱してやりました。さうして置いて中納言は、そのまますまして歸つて行つてしまひました。おどろいたのは猿でした。こんなひどい目にあはされたのは、生れて初めてでした。

三

翌日、中納言は秀吉の御前へ出ました。

「君の御顔を拜して嬉しうございます」と、お定りの文句をいつて、中納言は丁寧に頭を下げました。すると、秀吉の方では待つてゐた、といはないばかりに「おい、猿」と呼びかけました。呼ばれて猿はいつもの通り、竹刀をかついで、こ〜と小走りにとんで行きましたが、いざボカツとやらうと思つて、ひよいと横顔を見ると、びつくりしてしまひました。忘れもしない、昨日さん〜自分を擲つて行つた男ではありませんか。

「新左衛門どの、甚だ恐れ入つた願ひだが、秀吉公お氣に入りの猿を一寸拜見を願ひたい」といつて、頼みました。新左衛門も、日ごろ知り合ひの中納言のことですから、すぐと承知して猿を入れてある檻のところへ案内してくれました。見ると猿が赤い着物を着て、高慢な顔をして

「こいつは、まだ擲つてやつたことがないな」と考へてゐるやうに中納言をじろ〜見ました。

そこで中納言は、用意して持つて来た人參を出して、それを折つてやつては猿の御氣嫌をとつてゐましたが、その内に新左衛門がゐなくなつたので、しめたと思つて、いきなり檻を開けて、驚いてゐる猿の襟首をつかんで多へ引出しました。それから地面へ猿の鼻づらを押つけて、力まかせに二三遍ゴシゴシとすりつけましたが、それだけではまだ足りないと思つて、こんどは石のやうな骨を回して、一つ

「これは大變だ。自分より上手だ。とんでもない事だ」さう思つたのでせう、猿は、竹刀をかついだまますたこら逃げて歸つて來ました。秀吉は變だなと思ひましたが、昨日のことを知りませんから、こんどは前よりも大きな聲で、

「猿、猿」といひましたが、猿はち〜こまつてしまつて、しまひにはふるへてゐました。

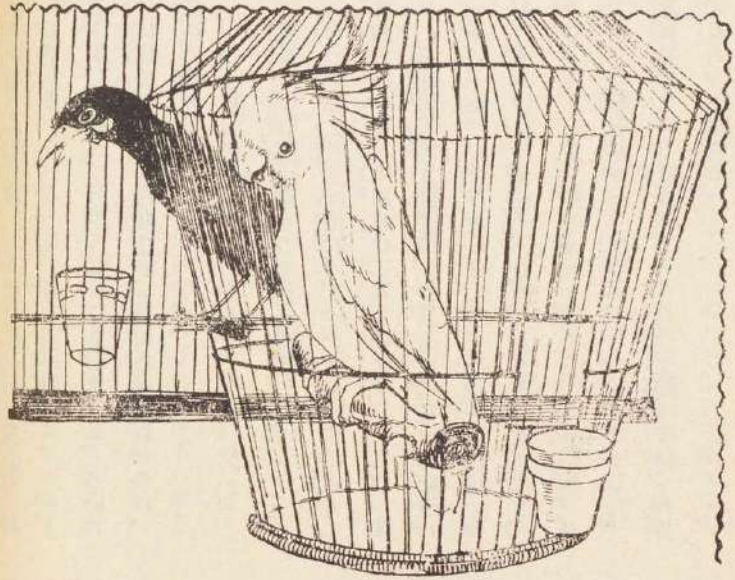
そこで中納言は、いよ〜と秀吉の御氣嫌を伺つて歸つて行きました。しかし秀吉は當てが外れたので、がっかりしてゐました。

さて、その日から大阪城内ではこの事が大變な評判になりました。

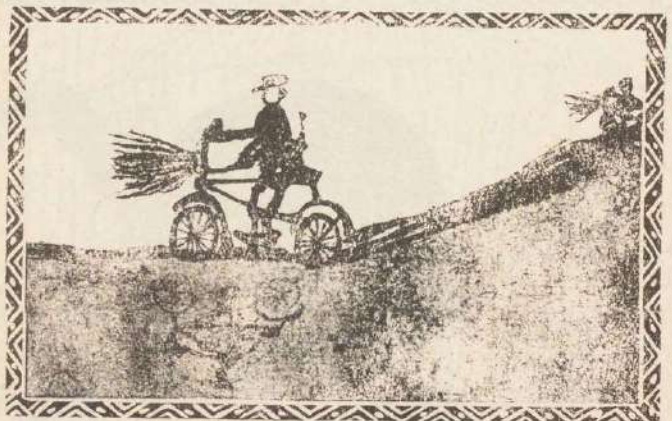
「青葉山中納言は實に偉い男だ。猿の方で恐れてちこまつてしまつた」といつて、みんな感心してゐました。しかし、中納言は、をかしくて堪らないので、内密でくす〜笑つてゐました。(をばり)



「君が代」唄はせよう
 「巖となりて」と
 唄はせよう
 わたしも
 「君が代」唄ひませう
 「レ・ド・レ・ミ・ソ・ミ・レ」と
 唄ひませう



九官鳥に
 「君が代」唄はせよう
 「千代に八千代に」
 唄はせよう
 鸚鵡に
 九官鳥
 (少女童謡)
 野口雨情



「自轉車」
奈良縣磯城郡三輪小學校 第三 中野 隆一

童謡 野口雨情選

丘の草
東京市深川 坂田 露香

夕日の丘に

綱の子三羽

織子がひとり

泣きく摘んだ

おんばこ 枯れ葉

雷門
東京市外戸塚 保科 いつ子

赤い赤い 雷門

赤い赤い 雷門

雪の時間に

日がさして

くつて行くのは

蛙蛇の目

三つ星

お正月

星

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

東の空の三つ星
仲よく並んで光つてる
明日の晩も 光つておくれ
豆腐一丁買つて
とまけてあけよ

仔馬と粉袋

東京市麹町區三 丹羽 彦熊

仔馬は牧場へ 粉袋

背中へ しやんく

載せてつた

袋が破けて 粉が散る

仔馬は知らずに しやんく

櫛の葉

長崎市長崎醫 岩崎 行義

ハラハラ落ちた

櫛の葉は

風にゆられて ゆうらゆら

風にゆられた櫛の葉の

お船の櫓頭は誰だらう

キユーピー

東京府下子 若王子 賢子

あたまがびよこんと

とんがつて

リボンをかけるにや

丁度よい

だましてリボンをかけてやる

水菜

大阪市西區八 三木 貞男

水菜は霜に

しをれてないた

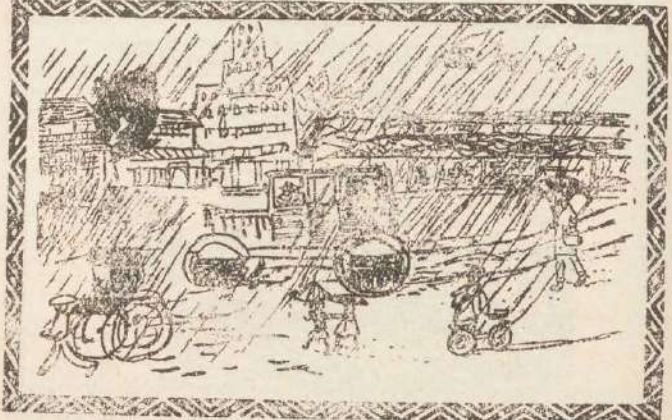
無慈悲な霜は

降らねばよかる

早よ日があたら

三つやん

東京府下新井町 福岡 信夫



「雨の晩」
神戸市西舞塚三七 渡川 長治

きれいな星が
空いつばいに

晶球のひかり

お一つおくれ お二つおくれ

闇夜におくれ

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道

一本道



「火事」

長野縣赤穂小学校 四年 松崎 好秋

お茶吞んでた

霜の朝

仙臺市北四 刈田 仁
 番町廿一
 水霜小霜 酒倉の
 屋根の裳に 銀の粉
 三羽並んだ 鳩ボツボ
 眞赤なあんよが冷たかろ

お月さん

京都府河鹿郡 田和 千穂
 物部村西坂
 十五夜お月さん
 わたしの母さんどうしたらう
 晩になつても歸らない
 わたしが泣いても歸らない

地藏さん

東京市淺草區 伊藤 温子
 西島越町八
 地藏さん 地藏さん
 よだれかけの お坊さん
 どつちの道は
 近道なのか 教へておくれ

雀の卵

仙臺市太 佐藤 愛子
 まや下四
 椶の木の上の
 雀の卵
 あぶないもんだ 風吹くたんび
 椶の木がゆれる

雪

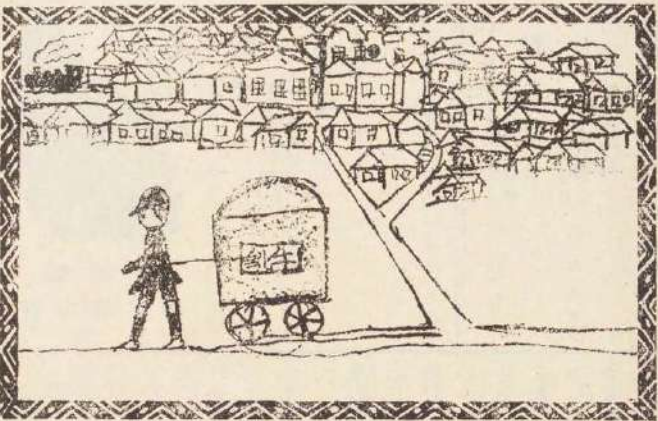
東京市外代 松村 公一
 本四八〇
 空の星が泣いて
 白い涙をこぼした
 お日さま魂消けて
 目を開いて睨めた
 白い涙は解ける

妹

下關市清和 川村 きみ子
 園一號地七
 歳はいくつ?
 三つ? 「ウン」
 四つ? 「ウン」
 おりこ? 「ウン」

「牛乳配達」

群馬縣一宮小学校 三年 折茂 豊



わからんよ 「ウン」

南天の實

美城縣結城 松村 仁平
 郡三友校
 南天の實一つ さんご玉一つ
 一錢に一つ
 安いからお買へ
 はいく買ぼよ

兎

京都市黒門通 河合 秋影
 元雲錦寺下
 お耳の兎 お耳を枕
 お日向ほつこ
 お耳に泥が
 一杯ついた

紙礫

山口縣小 楚山 牧人
 郡町新町
 ボツカリと 紙礫
 仁王さん眼玉が
 ギョロリした

夕鴉

長野縣小 矢島 邦助
 諸町市町
 向ふの森に鴉が啼いた
 タぐれ鴉
 お月さん青い 空から
 あがる

すゞめ

佐賀縣神埼郡 高野 千秋
 城田村神水川
 雲の中の 小つちやな雀
 はぐれた雀
 もう日がくれる
 お家へかへれ

指が動く

北海道夕張 善理 世裏翁
 郡夕張町三
 指が動く 拵指 小指
 紅さし指も 人さし指も
 順々に動く 一緒に動く
 五つの指は
 不思議な指だ



幼 年 詩
若 山 牧 水 選

雪 (賞)

福島縣二本松第一小學校 君島 ヤイ

前の島の白い雪
明けても暮れても
白いな

評、何といふ清らかなうたでせう、それを見ながら、あなたもきれいに祈りなさい。(牧水)

ゆきの夜 (賞)

京都市日 荒木 スズ子
彰校 第三

ゆきのつもつたさびしさに
上のお空をみあぐると
そらにはきれいな
ぎんの星

評、こんどの歌に「うた」(幼年齢のこと)を私は子どものうたと讀んであります。集つたことばはない、これもどれもみな同じ様にいいのでしまひにはどれを賞にしたい、か困りました、これもほんとに住い歌です。(牧水)

星

福島縣二本松第一小學校 橋川 千代

ゆふべわたしが
うらへでると
お星様が

たくさんゐるで
皆な一しよに
私の顔を
見た

評、驚いたでせう、そして笑つたでせう。(牧水)

カヘル

山口縣柳井小學校 飯田 若夫

ドブガヘル
アラガヘル

綴 方

編輯部選

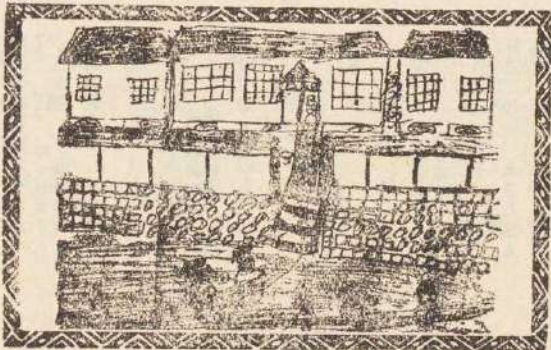
けんこび (賞)

茨城縣鹿野郡 吉川 ハツ
若柳校 第五

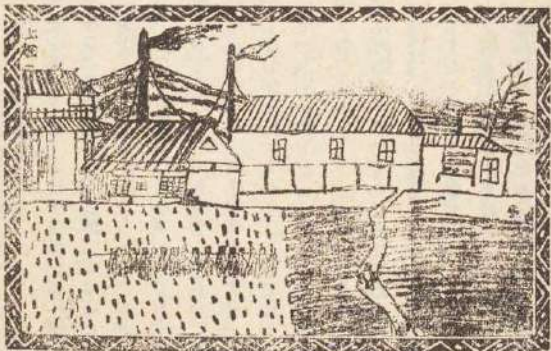
あまりさむいのでけんこびをした。おぢよちやんが「あのッおなちやんちのろし竹あんべエ」と言ふと、おしづが「うん」と手を息ではッはあつためながら、東の方を見て言つた。「その一等東ののろし竹んとこまでにすべよなア」と人さしゆびを東の方にさして、おぢよちやんがいふと、おなが「はあくみん、しよつよ」と言つて、手をぼうろつて居ると、みんなおれも〜と言つて手を出して来た。おしづとおぢよちやんで、私とおみかで、おなとおみつにわかつた。

小さい人たちが先にしつけんした。みんなは「十」などと言つて居るのに、おみかはなかくならないので、私は「おみかはおとめをおぶつて居るので、はねられないので私は義とくんだ。みんなして手をそろへて、「ちーツちのちーツ」といひながらしつけんした。私は六ツになり、おなは十になつた。「義し六ツ」と言つてもししやとして居るので又「義ッーみんなで三十六だかはねろよ」と言ふと、やうやくてつほ見たいなものをいぢくつて居た手をはなして「あッ」と言つて来た。あアどこじやねイ義がそんなものばかりいぢくつて見ろう、はア七十四だか早くはねろう」と私が言ふと、やうやくはねはじまつた。おぢよちやんは「おしづウ二十おしづよウ二十一だよウ」と言ふとおしづもはねはじまつた。おみつが方はいつもけす上りなもので、おなは「いいよおら方は、かにやねにきまつて居んだかなおみつツ」とおみつにぶつさるやうにして言つた。

さういふふうには五六回やつて、こはくで、こはくでしようがないのでやめた。



「學 校」
長野縣伊那小學校 第三 松澤 利美



「工 場」
山口縣柳井小學校 第二 上田 朝一

ソラムカフヲドブガヘル
ツルツルガヘル
ドブガヘル

評、いつたいに女の人のに住いのが多くて
困つてゐた所へ君の男らしいこの歌を見
て私は大に喜びました。(牧水)

ねこ

京都市日
彩校尋三 小林 静子

ゆうべねこが
子をうんで
ニヤンノとないてゐた。

評、氣どつた歌よりこんな正直なもの方
がどれだけのか解りません。(牧水)

ねこ

山口縣柳井
小學校尋二 藤元 正代

ねこさん
わたしがここにゐるから
あなたはあつちから
まはつておいで
ねずみ

同

ねずみさん
ねずみさん
あなたはもう十二時になつたのに
ごはんと食べずに
をるのですか

空の世界

札幌區北十三
東一二三三 三谷 榮吉

あゝ空の世界に行きたな
いつ月見ても兎さん
僕を迎へて居るやうだ

波

福井縣高濱
小學校高一 一瀬 三郎

大きい波
小さい波
白い頭出して
ドタ／＼寄せて来る

みかん

若狭高濱尋常
小學校高一 吉田 はま
あかいかん青いかん
どつちも寒い

目から火

福井縣高濱 伊藤 藤三郎
小學校高一

僕の家の店先へ坐つた秋ちゃんと臈ち
やんが「でほちんでおしやいをしようか
い」と云つて、二人はひたひと、ひたひ
を合せてやつたが「いたいたであかんわ
ア」と云つてやめにした。それで僕は「そ
んならわしがいたやうにしてやら
う」と云つて右手を握つて、二人のひた
ひとひたひの中に入れて「こんでいたな
い、一二三」二人は一心に僕の左右から
おし出した。僕はいたくて仕方がないの
で一時に手を取つた。二人はコッソ「ア
イタタタ」とさげんだ。臈ちやんは涙を
出して「目から火見たいなもんが出たわ
な」と不思議がつて居る。秋ちゃんも、
ひたひをおさへながら「むちやするがな
」と云つて怒つて居る、僕はをかしてたま
らない。
二人のひたひは赤くなつて、ぶつくり

ふくれて居る。

上體左右屈

朝鮮大邱公立第 釜瀬 虎雄
小學校尋六

「手を横に上げ上げッ。皆一度に手を
あける。次は何だらうと思つてゐると、
「上體を左にまけーまけー。」イッチチ……
「からだを眞すぐする。」ニイーイ。今
度は右にまける。四五度すると手がだん
だんだるくなる。曰井君や金谷君も、だ
るくなつたと見えてもぢ／＼してゐる。
まだか／＼と思ふとなほだるくなる。そ
のうちに「やめーッ。」といはれたので、
すんだのかと思つて力を入れてゐると、
「なほれ。」と仰有る様子も見えない。しば
らくすると又同じ運動だ。
「上體を左にまけーまけー。」
誰もだるくなつたと見えて「クスク
ス。」と笑ふ聲がする。三度はかりして漸
く「やめー。」がか／＼つた。よろこんでゐる
と中々「なほれ」がか／＼ならない。手が金々

ふしんばを通つて

神奈川縣都岡 鈴木 サチ子
村華英校尋六

だるくなる。先生は一向平氣で「小鳥手
が下つた。」と、やつぱり平氣だ。手は一
層だるい。ちゃめたりのばしたりしてゐ
ると、やう／＼のことで「なほれ」がか／
つた。皆は一度に手を下した。何だか重
い荷物を下した氣持で、思はず大きな溜
息をついた。

フアトコセー

コリヤナンデモセー

コレハイセイー

アードツコイ／＼

と、秋の入り目をうけて、おもしろさう
に歌ひながら「どたん／＼」と土をた
いてゐました。

賣出し

龜の子

長野縣野澤
小學校尋四 森 多聞

けふは私の家の大賣出しですから、み
んな朝早くおきて、はたをたてたり、大
きなかんばんを出したりして、きれいな
いうせんちりめんや、よせぎれをかざ
つて、おきやくさんのくるのをまつてゐ
るとまもなくおきやくさんがたくさんき
ましたので、大そういそがしくなりまし
た。おくにゐたおちいさんもみせへ出て
おてつだひをします。小ぞうは大き
なこゑで、「いらつしやい、いらつしや
い。」といつてゐます。おきやくさまは、
「やすい、やすい」といつてにこ／＼して
かへります。ほんとににぎやかでした。
店をしまつてから、いろ／＼のごちそう
が出たので、みんながよろこびました。
おとうさんはごく／＼さまとおれいをの
べました。

しんほして
垣のそばに立つてゐる
あかいみかん寒いな
青いみかん寒いな

冬の海

黒い空より雪はふる
海はがうく波の音
見る間につもる
白雪が
瀟砂の上に

福井縣本
小學校 藤田 榮

枯葉

山の上から
小さな枯葉が
飛んできて
海の上へ落ちて
浮いてゐる

福井縣高濱
小學校高一 胡間 六郎

かぜ

おおさむい風
せなかをふいて

茨城縣結城
郡五箇尋三 松本 まさ

かほみいで
おふろのおゆがさめさうだ
そのうちうらの付やぶへ
がうつと吹いていつた

ねずみ

ねずみが
えんのしたから
くいかけいもを
ころがして
よこした

福島縣二本松第
一小學校尋五 安齋 千代

雨

あめさんく
私がつてゐるうち
やんでくれ
はやくはやくやんでくれ
それまでちつとまつてゐる

京都市日
寧校尋三 淺井 スエ

▼佳作 △鳥(福井) 石橋周一 △火事(大分) 清水和夫 △雪合戦(静岡) 山本正雄 △小島(東京) 人見静子 △雨(三重) 西澤商一 △たこあげ(三重) 服部智男 △箱(茨城) 柳田登美子 △木の葉(静岡) 中野勇次 △赤ちゃん(東京) 千坂正次 △雪ノ日(栃木) 山口隆志(以下通信欄)

僕の幼い時、龜を賣る人が来ました。僕が母さんと一しよに、土さうから歸つてくると、人が大ぜい集つて、がやがやさわいでました。お母さんは「あれは何だ」と言つてすぐ行つて見ると龜の子でした。大人や子供が大ぜいで、この龜が一番大きいのだの、小さいの言つて、あつちへ行きこつちへ行きしてゐるのでした。僕はほしくなつて母さんに「買つて買つて」と言つて、三匹買つてもらつて、はちにもれてよろこんで、四番の座敷においてかはいがつてゐまし。が、次の日に行つて見たら、死んではちにういてゐまして。それをべちやるのがをしくてなりました。

今年の正月、僕はそのことを思ひ出して、母に「龜は萬年生きるなんてうそだね。幼さい時買つてもらつた龜は死んださ。」と言ふと、兄さんが横から「馬鹿あつた。龜は飼ひ方が悪いのだ。」といひました。

犬の泣聲

東江市駒込
小學校尋四 猪飼 孝子

「チン、チン」と二時がうつてから間も無い事でした。四五間先の、おだんご屋あたりで、けた、ましい犬の泣聲が聞えました。その聲がだんく強くなつて、今にも私の、まくらもとへ、飛付いて、きさうです。私は、あまりのこはさに、ふとんの中へ、もぐつてしまひました。その中、犬の聲は小さくなつてきました。二三分たつと、その聲はぱたりととまつて、又静かになつて、しまひました。

セキソソ山カラ見タケシキ

埼玉縣本庄
小學校尋二 三宅 キク子

私はこのあひだせきそん下へあそびに行きました。下ではけしきがよくないので山へのほりました。山から下を見ると、だいいばんに、しみづがはらが見えます。きたの方にはとね川のとてがみえます。東の方にはせいれんじよ、しろ山が見え

ます。西の方にはしみづがはらにかまつてゐるはし、あさ日むらのがくかう、たんほ、はたけなどが見えます。南の方に私は私のがくかうがみえます。せきそん山から見たけしきはよいけしきでありました。

電燈の消えた時

長野縣高田
小學校高二 安 西 ゆきえ

「アツ」と私と従妹とは叫びました。あたりはまつくらでした。お父さんがお吸ひなる煙草の火が螢のやうに光つた。伯父さんの顔がうす赤くほんやりと見えました。「コッソ」と音がしますと、煙草の火は火鉢の手に消えてしまひました。お風呂の中でコチャノと水音をたててるのが聞えてくるばかりでみんなだまつてゐます。

氣根勝負

朝鮮大邱公立
第一小學校六年 武尾 健藏

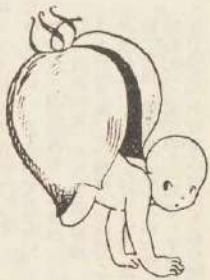
今日は集金の支拂日である。學校から歸ると部屋に入つて、雜誌を讀んでゐたが、それも讀み終つたので、一

つ集金に来る奴と氣根くらべをして見やうと考へた。

所へ「御めんなさい」と女の聲だ。おぎやあ〜。と泣く聲がする赤ん坊をおんぶしてゐるらしい。返事をしない。「御めんなさい。」「ごめんなさい。だまつてゐる。」「おぎやあ〜。」「と、やかましく赤ん坊がなく。」「ごめんなさい。」「おぎやあ〜。」「よし〜。ねんねねんね。僕はやかましく仕様がな。」「ごめんなさい。」「赤ん坊の泣く聲も一層はげしくなる。とう〜。氣根負けして「はい。と出て行つた。お母さんにいふと「裏へまはんないといひなさい。」「といつたので、その通りいふと、左様で。」と頭を下けた。

「ごめんなさい。男の聲だ。又来たな。今度は負けんぞと一人で力んだ。ごめんなさい。」「ごめんなさい。」「何度いつても返事をしない。え〜。と〜。かへつてしまつた。

▼佳作 △雪の朝神奈川 井上ツル △兄さん(山梨) 土橋都子 △歴史の試験(東京) 松下春三 △雨のしづく(兵庫) 土居忠 △冬の夜(京都) 坪内伊都子(以下通信欄)



通信

自由畫 山本鼎

▲木村八千代さんのお父さんに——八千代さんの畫でも面白く見ました。出来るなら、もう少し濃く描ける鉛筆(墨と毛筆でもよし)と思ひます。其處いらの必然から鮮明と調達とが引き出されやしないかと考へます。それから畫が散逸しないやうに畫帖にしてつとてお行かれる時の興味あるお土産とならうと思ひます。如何ですか。

自由畫教育を試みて居る學校から生徒の成績を送つて來ますが、近來はなかく進んで來ました。お送りの繪はどれも同じ位の程度と考へます。畫用品が粗悪なのが残念です。出來るならもっと濃くかける鉛筆——色の蠟鉛筆など持たしたいものです。圖畫教育の當事者が、第一に努力すべき問題は、畫用品の改良と其廉價な供給であらうと思ひます。

新しく出た本

◆綴り方(菊地知勇氏著)——綴り方のいゝ参考書です。あり来りの型をゆけて、いゝ綴り方を書くにはどうしたらいいか、その心得とそれから實例とを親切に、深山のせてあります。綴り方の参考書として今のところ一番いい本でせう。是非一讀をおすすめします。鶴町内幸町一ノ六 金港堂發行 定價壹圓廿錢

◆小きき芽(中島海紅氏著)——面白い少年小説集です。誰れでも一度は少年が感じる悲しみや、驚きや、喜びがよく書いてあります。近頃めづらしい品のいゝ少年小説集といへませう。(京橋南船場町 實業之日本社發行 定價壹圓)

◆聖賢をめあてに(高崎能辨氏著)——日曜學校の教師さんが少年少女に聞せるお話を澤山集めた様な本です。お面白いお話しの中に、おのづとキリスト教を吹込むやうに出来てゐます。キリスト教信者の家庭には是非あつていゝ本です。(京橋區銀座 醒睡社發行 定價壹圓)

◆せきなき心 繪入童話(佐竹草迷宮氏著)水島爾保氏畫)——實に、せいたくな美しい童話集です。これほどきれいな本は一寸もつらしてせう。いろは四十八文字を各々一字づつとつて、それを頭とした動物や虫を一つ一つ童話に歌つて、美しい畫を添へてあります。水島さんの畫が中々きれいで、幼い人達のお友達として可愛い本です。(東京芝公園 支社發行 定價金貳圓五拾錢)

若券集童話選評

選者

應募童話の数はいよゝ／＼多くなつて來ました。本月分の選の中から次の數篇を佳作として選出しました。益田一郎氏の「太閤様の猿」伊藤温子氏の「不幸な友達」秦 春美氏の「お清と双子池」梅伴氏の「公園の朝」作間 博氏の「嵐の思ひ出」岡氏「幸福の國へ」新谷義晴氏の「花の王様」伊佐登志氏の「夫婦の兎」戸露光氏の「あの國この國」宮本秀雄氏の「お母さんば」山本 正氏の「森の呼び聲」藤井秀夫氏の「鐵ちゃんの船遊」松平正樹氏の「蝶」静江八十八氏の「長命水」赤澤芳榮氏の「狸の花瓶」近江谷益代氏の「健美君」さて以上の諸作を厳選した結果左の一編を入選として三月號の誌上に掲載する事になりました。

太閤様の猿

益田 一郎氏作

綴り方を見て

選者

吉川さんの「けんとうび」は、すぶるん方音があつたので、わかりにくい所がありますが、すなほ書いてあるので地方の特色

がよく出てゐます。三四人の子供が集つてけんとうびをしてゐる畫が眼の前に見えるやうです。正直に書いてあるところをとりました。伊藤君の「目か火」は題材が變つてゐるのがよいです。みなさんもなるたけちがつた題材をこしらへるやうにこころを少くください。整瀬君の「上體石不崩」これも一寸變つてゐます。面白いです。鈴木さんの「ふしばを通つて」はまづたく珍らしい書きぶりです。こまかなことをこたく／＼書かないで、かういふ風に要點だけをつかまへて、それで全體の情景をはつきり出してゐる所などは、なか／＼どうしてうまいのです。一浦君の「賢出し」はたつしやな筆で年末の気分を出してゐます。森君の「龜の子」はお正月になつて古い記憶をよび起したものです。思ひ出したまゝを正直に書いてゐるのでよろしい。猪飼さんの「犬の泣聲」では「まくらちもと」とびついてきさうです。が光つてゐました。三宅さんの正直な所をとりました。安石さんのありふれたことですがよく出来てます。

- ▼自由童話作 △トキカキ(英城 岩上トキ子) △キカゴ(英城 廣徳) △ケシキ(山口 高橋ハナ子) △雪がやんだが(東京 飯山ふじ子) △ツネナシナツチ(英城 猪瀬邦重) △女の先生(英城 石川ふく子) △家ト木(山口 相原正) △タシタ(東京 河戸太郎) △土蔵(松本 松山房子) △朝の勝山町(長野 吉武守一) △ラチヤ(仙臺 香味ふじ子) △ケシキ(神奈川 豊住芳造) △コゴロ(縣道(英城 野口清) △田舎の正月(東京 草薙眞一) △土蔵(山口 窪田隆人) △きしや(英城 谷原勝) △女の子(淡路 やよい子) △家ト道(山口 藤本利子) △羽根つき(鶴島 乾美佐子) △續日記(大分 三好英雄) △雪の夜(横濱 岩下五郎) △秋(静岡 望月嘉郎) △家(奈良 川辻數一) △石碑(静岡 梅野秀吉) △たねさん(愛媛 日野貞子) △子供(長野 森山止) △かばん(福岡 野川一夫) △馬(大分 清木一夫) △門(静岡 中野勇次) △けしき(福岡 齊藤榮一) △土瓶、横濱 小林永和) △牛つかひ(東京 菅野圭助) △けしき(秋田 林田誠一) △冬(東京 林精五郎) △顔(東京 程塚長吉) △だるま(長野 牧田新助) △しやせい(埼玉 三宅眞一郎)
- ▼幼年詩佳作 △櫻の花(福井 日置新太) △敵版の湯(大阪 池田郁三) △芋壺(長野 井手鐵) △船(静岡 村岡榮助) △日本(山梨 土橋千) △夏の森(京都 川村カサ) △鐵の音(兵庫 土居忠) △燕(名古屋 成瀬安城) △かぜ(英城 松本まさ) △すいめ(山城)

大附録付四月號豫告と 讀者文藝大懸賞募集

四月號は特別號として讀者の皆さんをアツといはせるやうな、實に面白い、大附録を添へて出します。また讀物も平生の月とは變つた特別に面白いものばかり集めるつもりです。大附録とは何か？ 面白い讀物とは何か？ もう一と月の間です。楽しみにお待ち下さい。

向、六月號は「讀者文藝號」の意味で出しますので、懸賞で皆さんから童話、童謡、綴方、幼年詩、自由畫を募集します。今からとしく募集に應じて下さい。懸賞は左の通りです。

- ◇ 童話 (十行廿字詰原稿)
 - (一) 等 金六拾圓
 - (二) 等 金貳拾圓
- ◇ 童謡 (二十行以内)
 - (一) 等 金參拾圓
 - (二) 等 金拾圓
- ◇ 綴方 (十行廿字詰)
 - (一) 等 平田秀木先生撰
 - (二) 等 神野若三郎先生作
 - (三) 等 島崎藤村先生著
- ◇ 自由畫 (半紙判の大き以内で)
 - (一) 等 ガリバー旅行記
 - (二) 等 頰白の歌
 - (三) 等 烏崎藤村先生著
- ◇ 幼年詩 (二十行以内)

自由畫に就て質問のある方へ

「金の船」が出て、こどもの自由畫を募集してから自由畫の勢がいよいよ盛になりました。今では自由畫の意味が大抵誰にも解つたやうです。たうとう教育界の大問題になつて、今大騒ぎをやつてゐます。實に愉快ではありませんか。もう直ちに、圖畫のお手本を真似て描くやうな教授法はお止めになつて、皆さんが大好きな自由畫ばかりを學校の先生が描かして下さる事になるでせう。

しかし、まだ自由畫の精神が呑みこめなれて迷つてゐる人もあるやうですから、今度から山本鼎先生にお願ひして、皆さんの内で自由畫に就て質問のある方には當方の問一々お答へをしていただく事にしました。質問は、要點だけを簡單に、はつきり解るやうに書いて編輯部宛にお送り下さい。五月號の誌上から解答を載せる事にします。

▲記者様 新年號は面白うございました。附録の双六も面白うございました。これに昨年のお夢双六と二つになりました。他の雑誌の双六もかなりもつてをりますが、とてもくらべものになりません

▲讀者様 新年號は面白うございました。附録の双六も面白うございました。これに昨年のお夢双六と二つになりました。他の雑誌の双六もかなりもつてをりますが、とてもくらべものになりません

▲讀者様 新年號は面白うございました。附録の双六も面白うございました。これに昨年のお夢双六と二つになりました。他の雑誌の双六もかなりもつてをりますが、とてもくらべものになりません

▲讀者様 新年號は面白うございました。附録の双六も面白うございました。これに昨年のお夢双六と二つになりました。他の雑誌の双六もかなりもつてをりますが、とてもくらべものになりません

口 村田とめよ) △パコマ公園(朝鮮 佐藤 義信) △方沙ノワタ(山口 杉原修治) △お山のふくろ(大阪 西堀ハル) △れげとけい(福島 渡邊みどり) △風(福島 澤井久子) △どうぶつふん(山口 池水保治郎) △ふくろ(神戸 滝川長治) △月の兎(東京 北村敏夫) △たるま(長野 宮崎通) △雀(福岡 嵯峨山富士男) △かげんぼし(福井 川口ハツ) △小犬(東京 阿部守忠) △星(愛知 佐藤榮一) △雪(秋田 村田誠一) △犬(京都 多田さよ子) △湯入りの道(神奈川 小野口兼治) △柿(京都 坪内千代子) △ワンタクロース(東京 菅野圭助) △貝(福井 小林千年) △初雪(福井 大野慈一) △雪(福井 福井 富田重三) △夕方(東京 江國清子) △からす(茨城 池田きく) △ふびすさん(福井 淺田鼎一) △柿(福島 荒木スギ)

金の船誌友募集
金の船誌友募集
規則書をお申込み下さい

▽綴方佳作 △おはじき(茨城 栗野とく) △今朝(盛岡 上田重彦) △ある日曜の日(福島 角田四郎) △るすに(東京 戸張れん) △氣根勝負(朝鮮 武尾健造) △ぶた(福井 澤田貞三) △富ちやん(福井 寺西千代) △梅子さん(秋田 宮腰芳子) △家のカナリヤ(東京 菅野圭助) △古き思ひ出(樺太 土橋スガ) △はたるがり(山口 木浦栄雄) △秋の来(長野 田中昭子) △島呂入り(福井 前田義男) △安曇野(大分 三好英樹) △

▽金の船誌友 ○大阪 佐藤忠君 ○長野 湯本正雄君 ○同 湯澤よしみ君 ○崎玉 平塚美奈吉君 ○福島 遠藤久男君 ○新潟 渡邊太平治君 ○千葉 大島ワノ子君 ○東京 四宮勝君 ○愛媛 日野貞子君 ○東京 松村公一君 ○東京 鈴木輝子君 ○鹿児島 木原久子君 ○東京 山田健二君 ○愛知 幸村太市君 ○東京 水野藤雄君 ○山梨 土橋都子君 ○北海道 松本よね君 ○岩手 菊地庚子郎君 ○岩手 鈴木重男君 ○大阪 三谷みつ子君 ○長野 藤岡孝義君 ○同 太田小学校児童文庫 ○東京 宮橋静君 ○大阪 伊藤恒久君 ○長野 小林莊一君 ○京都 小林良一君 ○福岡 荒川清二君 ○宮城 泉たか子君 ○同 橋本友子君 ○長野 神林教子君 ○愛知 彌富小学校 ○栃木 奈良守三郎君 ○長野 丸山桂也君 ○同 竹村仁蔵君 ○横濱 小林永和君 ○東京 曾我敬二君 ○同 横大君 ○同 本阿彌さみ子君 ○京都 長野清一郎君 ○茨城 瀬谷尚武君 ○東京 井上鶴松君 ○群馬 堀込卯三郎君 ○同 折茂登君 ○同 村山信雄君 ○同 山本賀雄君 ○同 高橋都治君 ○同 峯岸俊雄君 (以下次號)

金の船消息

▼楠山先生の「日本神話」がのり始めました。これより先に日本の英雄の物語を書いていた。よく書いたので、先生の御都合で先づ神話から始める事になつたのです。なるべく一回づつ讀切りにして十分皆さんに面白味を與へる積りです。是迄はかにも日本神話と書いたものがありましたが、何れもたゞ古事記そのまゝを今の言葉に書直しただけのもので、すが、楠山先生の「材料は主に日本書紀、古事記、風土記その他を採取して私の頭で別によられた人たちのと違つた特色です」と先生自身ははれてゐる通りで、それだけに苦心の大作である事が知られます。恐らく童話として書かれた「日本神話」中第一のものでせう。

▼沖野岩三郎先生は奥條が御病氣のため鎌倉稻村ヶ崎に引こまれ當分何にもお書きにならない筈でしたが、「金の船」だけのために四月號から引續いて書いて下さる事になりました。鎌倉五郎の話や、海の怪物の相談會の話や、慈張の男が辨天様から御利益を授けらうとして却つて泥棒にあふ話などの題材が山の様にあります。

▼第三回東京童話會は會員の忘年會を兼ねて舊曆二十六日東京府下吉祥寺の月窓寺で開かれました。會員のお手料理の御馳走が出て非常に盛會でした。

少年創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山秋水先生選
綴方……編輯部選

自由畫、幼年詩、綴方、どれも題は何でもかまいません。みなさんの好きなやうに描いたり、作ったりして下さい。原稿には必ず學校と學年、または住所と年齢を書いて下さい。よく出来たものは雑誌に出します。なかでもよく出来たものには賞品をさしあげます。特にすぐれてよくできたものには「金の船」賞をさしあげます。

懸賞創作募集

童話……編輯部選
童謡……野口雨情先生選

童話は二十字詰二百行以内、童謡は二十行以内、優秀な作品は推薦または特選として雑誌で発表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謡には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓童謡には五圓づつ賞金として呈します。

(原稿は金の船編輯所へ送つて下さい)
東京市外田橋三五一番地
金の船編輯所

定 價 一冊三十錢 送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)九十錢
半年分六冊(送料共)壹圓八十錢
壹ヶ年分十二冊(送料共)三圓六十錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御注文の際は、この號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。

振替口座東京〇五七貳番

送) 御注文は必ず前金で御拂込み下さい
金) 送金は小爲替でも切手代用でも宜しい
切手代用は(壹錢切手)一割増しです
注) 第何卷第何號よりと書いてください
住所姓名ははっきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へいたします

大正十年二月七日印刷納本(毎月一回)
大正十年三月一日發行(一日發行)

編輯人 藤田武三 藤田武三 藤田武三
發行人 藤田武三 藤田武三 藤田武三
印刷人 藤田武三 藤田武三 藤田武三
東京市小石川區大塚町八丁目八番地
印刷所 藤田武三印刷所
東京市麹町區飯田町六丁目二十五番地
發行所 キンノツノ社

請買新聞

明七 年刊	
代價	一月一元二角五分
半年	六元五角
一年	十二元
發行所	東京市小石川區大塚町八丁目二十五番地
印刷所	藤田武三印刷所

組織 變更

◎信用ある大新聞◎
大正八年秋組織改造後の本紙は政治、經濟、外交並外國電報に異彩を發揮し内外の報道機敏正確斯界の權威なり

面目一新

文藝欄、婦人欄の特設を誇とし紙面全體に創業の活氣と趣味横溢し記事に品位あり事務的にも家庭にも歡ばる
◎年中無休刊八頁◎



橋無くとも舟有り!!

中學校へ行けなくても落膽する必要は無い

競争の劇しい今後の社会に飛び出して成功しようとする人にとって何よりも必要なのは中等教育の業である。と云つて、いろいろな事情で中學校へ行けない人はどうしたらよいか、それにはたゞ一つの良法がある、ほかでもない本會へ入會して本會の理想的中學講義録に就いて學ぶことだ。本會の光榮者歴史や、本會講義録の特色は今更述べる必要はあるまい。

會長 尾崎 行雄

顧問並ニ學監
 遠藤博士 山内博士
 井上博士 浮田博士
 新澤博士 岡田前文相
 三宅博士

◎今が入會の絶好期!! 見本つき規則書は無料で差上げます。改正を加ふたのがこの講義録である。

大日本國民中學會

東京神田 駿河臺
 櫻特東京四二〇〇番電話神田



女兒改良服

三月一日より新製品發賣

東京 上野
 松坂屋 いたう呉服店

在來の製地を僅かの所要尺で平易に仕立る事が出来且つ衛生にも適ひ体裁も優美なので昨秋發賣以來各學校御家庭に大好評を以て迎へられつゝあります (裁縫方説明書進呈、附屬品一式取扱)



ライオン煉齒磨
 快い匂いと
 やさしい色とは、
 私達の心を
 楽しくします。
 そして、すぐれた
 効果は、私達の
 歯を強く美しく
 します。



大正八年十月十六日
 大正十年二月七日
 大正十一年三月一日
 大正十一年三月一日

東京 キンノツノ社 發行